

八重山の戦後復興期における幼稚園教育 (1)

—みやまえ幼稚園沿革誌史料に基づいて—*

大山伸子**

Abstract

沖縄県八重山における幼稚園設立の歴史には、特筆すべき軌跡がある。八重山の幼稚園は、昭和8(1933)年に開園した八重山で第1号の「やえやま幼稚園」に続き、戦後、「みやとり幼稚園」、「ふたば幼稚園」、「みやまえ幼稚園」、「天川幼稚園」と次々に開園されるが、その設立には、地域の人々が幼児教育を急務とする熱心な訴えや自治会の支援、地域の篤志家などの後押しが、開園の原動力であった。いざ、開園に到っても、行政の財源的な援助もなく現実的には厳しい私立園として苦難を強いられながら、教諭達も献身的に保育に携わった。園舎は、地元の青年会館や御嶽の庭に俄かに作られた借り住まいでスタートし、例えば、「みやとり幼稚園」、「みやまえ幼稚園」、「天川幼稚園」のように、鳥居が園の校門である幼稚園もあった。

本論文は、こうした、独特の歴史を持つ八重山の幼稚園開園について、戦後まもなく設立された当時の実情や幼稚園教育を知る手掛かりとして、「みやまえ幼稚園」を例に取り上げ論述する。

本論の研究手法として、「みやまえ幼稚園」の開園に尽力し初代園長となった、「宮城文」の直筆による『みやまえ幼稚園沿革誌』の貴重な第一次史料を基に、みやまえ幼稚園開設の経緯や、宮城が幼児教育に関わった状況、保育実践について、その記録をつぶさに読み取り、八重山の戦後復興期の幼稚園教育について明らかにするものである。

I. はじめに

1. 八重山の幼稚園設立の概略

沖縄県・八重山諸島における戦後復興期の幼稚園設立は、独特の成り立ちがある。それは、幼稚園開園の背景に、地域や住民の幼児教育に対する必要性の訴えや強い熱意があり、地域ぐるみの物心の援助や自治会の支援など、地域共同体の協力が開園の大きな原動力であった。

第二次大戦後の荒廃した非常に厳しい現実に立ち向かいながらも、行政のバックアップを殆ど受けずに、私立園として発足、いわば、“自力の船出”だった。

八重山の幼稚園設立の歴史は、1933(昭和8)年4月10日に創立した、ヤエマ幼稚園(「ヤエヤマ幼稚園」を経て現「やえやま幼稚園」)を嚆矢とし、戦後まもなく、1946(昭和21)年1月25日にはミヤトリ幼稚園(現「みやとり幼稚園」)、1947(昭和22)年6月には、みどり幼稚園(後に閉園)、1949(昭和24)年3月10日にはふたば幼稚園(現「あらかわ幼稚園」)、同年3月26日には、たけとみ幼稚園(後に閉園)、そして、同年4月12日に、ミヤマエ幼稚園(現「みやまえ幼稚園」)が設立された。その後、1954(昭和29)年までに16園が開園され(同年公

*Kindergarten Education in Yaeyama during the Period of Recovery after World War II (1)

—Based on Materials Pertaining to the History of Miyamae Kindergarten—

**Nobuko Oyama

立幼稚園に移管)、さらに、本土復帰の1978(昭和53)年までには21園が設立され、閉園や園名の改称を経ながら、現在、24園(内1園は私立)が存在している。(以下、現幼稚園名で記す)

戦前、八重山で最初に開設された「やえやま幼稚園」は、八重山地域の幼児教育の立ち上がりの遅れを懸念した民間人の牧志つるゑ(1897=明治30~1979=昭和54)⁽¹⁾が、地元の篤志家や、牧志の母校である沖縄女子師範学校、ひめゆり学徒同窓会と共に、幼児教育の重要性を訴え、「やえやま幼稚園」の開園に尽力したのである。牧志が協同して進めた母校や同窓会のように、地域外の団体が強力な支援団体ということも異例であろう。1958年(昭和33)、その五代目園長に牧志つるゑが就くが(開園以来、やえやま幼稚園の保母や副園長として勤務)、牧志は、八重山の幼児教育に先鞭をつけた人物である。

戦後まもなく開園した八重山の幼稚園設立の共通点は、幼児教育の必要性に対する行政の立ち遅れを背景に、地域住民の熱心な後押しによって、私立園として立ち上がった経緯である。

例えば、「みやとり幼稚園」、「あらかわ幼稚園」、「みやまえ幼稚園」などは、設立者が地域の篤志家や教育者であり、園舎は自治会の青年会館や御嶽の広場など、地域の場所を借用して(当時は無料)、開園されている。

本論文は、こうした八重山の幼稚園設立の独自性や、当時の幼稚園運営、保育実践について知る手掛かりとして、「みやまえ幼稚園」の開設に尽力し初代園長に就いた、「宮城文(みやぎ・ふみ)」の直筆による『みやまえ幼稚園沿革誌』⁽²⁾をつぶさに読み取ることで、当時の幼稚園教育の実情を把握しようとするものである。

2. 宮城文とみやまえ幼稚園

宮城文は、居住する宇新川の周辺地域で、みやとり幼稚園やあらかわ幼稚園が次々と開園される現状を横目で見ながら、幼児教育の重要性を訴え、考えを同じくする住民と共に幼稚園設立に奔走、開園にこぎつけて、「みやまえ幼稚園」の初代園長となった人である。

なぜ、本研究が「みやまえ幼稚園」であり、「宮城文」に焦点を当て研究するのかを以下に述べる。

その一つは、宮城は、八重山の生活習慣や食文化を詳細にまとめ、約600ページにも及ぶ労作、『八重山生活誌』⁽³⁾を上梓した人であるが、八重山文化の研究者としての偉業は多くの人が周知しているものの、幼児教育者として顧みられることはあまりなく、その足跡を知ることが、当時の幼児教育の状況を捉える糸口になるのではないかと考えたからである。

二つ目に、筆者のライフワークである音楽教育家、作曲家の「宮良長包」⁽⁴⁾を研究するなかで、その延長線上に、幼児教育家として、また、幼児音楽教育の熱心な実践者としての「宮城文」が浮きぼりになってきたのである。おそらく、長包の音楽教育の影響があることが推測され、宮城と幼児音楽教育との関わりを研究する意義も大きい。

宮城文が直筆の毛筆で記録した、『やえやま幼稚園沿革誌』の原本史料が入手でき、本研究では、この貴重な第一次史料を解読することが、当時の幼稚園教育の実態を把握する上で極めて重要ではないかと考えた。

その『沿革誌』は、保育記録の側面と、宮城が日々直面する幼稚園経営や運営の苦悩も書き綴られており、本論文においては、宮城が実践した当時の幼稚園運営や経営、保育内容、時代背景、そして、宮城が熱心に実践した幼児音楽教育について知ること、戦後復興期における、八重山の幼稚園教育の実情が少しでも解明されればと思う。

II. 宮城文の略歴

【写真1 宮城文：1949年頃】

宮城文は、1891（明治24）年11月28日、八重山群石垣町字登野城221番地に生まれた【写真1】。父、大浜景貞、母、マハツの間に二女として生を受け、屋号は「ハイミンヤー」と呼び、大浜家の家風は、厳格で教育熱心な家庭だった。それは、宮城が八重山から沖縄県立高等女学校（後の第一高等女学校）に入学した第1号ということからも、窺い知ることができるだろう。



当時の風潮が、“女性に学問は不用”という中であって、私財を投じて、沖縄本島那覇市在の沖縄県立高等女学校に入学させるということは、余程、両親の教育方針が確固たるものでなければ、可能ではなかったであろう。教育に理解のある家庭環境で育った宮城文が、後世、『八重山生活誌』を上梓し、八重山文化研究の道を拓いた一人になったことは、まず、優れた家庭環境があったことがあげられよう。

1. 小学校教員として活躍した時代

1911（明治44）年3月に、県立高等女学校を優秀な成績で卒業した宮城文は、奈良女高師学校への進学を勧めを受けていたものの進学を断念、すぐさま、郷里の石垣島に帰り、4月から母校の登野城尋常高等小学校（現・石垣市立登野城小学校）に着任した。

1911（明治44）年から1914（大正3）年の間、登野城尋常高等小学校に勤務したが、その小学校には、1907（明治40）年に赴任した“音楽教師”の「宮良長包」が勤務していたのである。長包は、1883（明治16）年、石垣間切新川に生まれ、宮城より8歳年上であった。

登野城尋常高等小学校に、1907（明治40）年から1915（大正4）年の8年間、勤務していた長包と、文が1911（明治44）年から1914（大正3）年の3年間勤めていた期間は、同僚であり先輩であり、また、偉大な音楽教育家として、長包へ尊敬の念を持って、仕事に従事していた時期と見ることができる。この長包との出会いは、小学校教員として、また、後に幼児教育者としての側面に、影響を与えることになる。

1914（大正3）年に結婚、宇新川の宮城信範（1890＝明治23～1955＝昭和30）のもとへ嫁ぐことになるが、夫の信範は小学校の教員（後に校長）で、宮良長包が二人を引き合わせたというエピソードもある。

1914（大正3）年4月より、白良尋常小学校（現・白保小学校）に赴くが、1日がかりの遠距離通勤の厳しさや、白良小学校への転勤命令には、政治的な軋轢が背景にあったことも起因していたからか、たった1日で退職を志願した。

その後、1915（大正4）年から1917（大正6）年の間、夫の信範が、離島の新城島（あらぐすくじま）の新城尋常小学校へ転勤を希望し、夫と共に赴くことになるが、新城尋常小学校は信範が校長で他に教諭が1名勤務しており、宮城は代用教員として勤務することになった。

その後、1917（大正6）年4月から1920（大正9）年まで、夫が黒島（くろしま）島の黒島尋常小学校へ転勤となり、宮城は、住民の要請により準訓導として教壇に立つことになった。いったん、退職している宮城にとって、代用教員、準訓導と初めからの出直しだった。

1920（大正9）年4月、信範の石垣尋常高等小学校（現・石垣小学校）の転勤にともない、ようやく、地元の石垣島へ戻ることになった。しばらくは育児に専念したが、石垣尋常高等小

学校には、1921 (大正10) 年から1933 (昭和8) 年3月まで12年間勤めることとなる。

その間、約20年間の小学校教員生活は、ずっと一学年の学級担任であった。

2. 市議会議員として才覚を発揮した時代

1931 (昭和6) 年の満州事変勃発以降、戦争は激化、石垣島にも軍部が配置され、民衆の間にも緊迫感が色濃くなっていた。台湾への集団疎開を奨励する動きも高まり、宮城家は、石垣島に夫と三女を残し、台湾への疎開を決意、1944 (昭和19) 年9月から1945 (昭和20) 年10月まで、台湾に移り住む事になった。

台湾での暮らしは悲惨なものだった。日々の食料にも事欠き、異国での不慣れな生活で娘をマラリアで亡くし、悲嘆に暮れた宮城は、1945 (昭和20) 年10月、一家で密かに台湾を出国、ようやく、石垣島に帰島するが、戦後荒廃の中での人々の暮らしは、貧困生活にあえいでいた。留守を預かっていた夫や三女と共に宮城家もまた、見る影もない惨状だった。⁽⁵⁾

1948 (昭和23) 年に宮城に転機が訪れる。同年3月、新選挙法により市町村長と議員の選挙が実施されることになるが、宮城は周囲の人達に押され石垣市議員に立候補することになる。ものの見事に当選し、初の女性議員となった。女性議員は、奇しくも、先述のやえやま幼稚園の設立に尽力した牧志つるゑと宮城の二人だった。

議員時代には、人々の暮らしが少しでも豊かになるよう、ライフラインや税金制度など、改善すべきことに東奔西走、また、女性の社会進出にも先頭に立って進言、政治家として社会に貢献し、一期4年勤めた。宮城の二男、宮城信勇氏 (那覇市在住86歳：言語学研究者) と孫の信博氏 (那覇市在住61歳) によると、毎日同じ着物で議会に出席し、「着物は一枚しかないの？」と周りから揶揄されたそうだ。貧乏で着物を新調できず、夜洗濯し、翌朝その着物を身に付けて出勤した、と懐かしく語った。

3. 幼児教育者として奉職した時代

小学校教員は、1933 (昭和8) 年、石垣尋常高等小学校退職を最後に初等教育の現場から退いたが、その後、議員生活を務めながら、1949 (昭和24) 年に、みやまえ幼稚園の初代園長に就き、幼児教育者としての第一歩を踏むことになる。

みやまえ幼稚園勤務は、開園した1949 (昭和24) 年から退職する1963 (昭和38) 年まで園長として在職し、名実ともに幼児教育者として本領を発揮、八重山の幼児教育界を牽引したが、宮城は、ただ単に、みやまえ幼稚園の“雇われ園長”ではなく、自ら身を粉にして働き、思いついたら実行する行動派であった。戦後の貧困時代に、未開拓分野の幼稚園教育に身を捧げるということは、余程、幼児教育への熱意と決意、奉仕精神がなければ務まらなかつただろう。

14年間の幼稚園経営、運営、保育実践、地域との連携や課題、そして、何よりも子ども達の様子を記した貴重な『みやまえ幼稚園沿革誌』が、苦闘を如実に語っている。

4. 『八重山生活誌』の大著を上梓した晩年

その後、東京に居を移し、晩年は那覇市に居住、1972 (昭和47) 年には『八重山生活誌』を著した。その年は、奇しくも沖縄が本土に復帰した年でもあった。

『八重山生活誌』を作家の池澤夏樹は、『読書癖3』⁽⁶⁾ で、こう述べている。「(略)一人の女性が自分が経てきた時代の生活文化をすべて書き記そうと決意した。9年あまりかけて知ると

ころを書き、不明な点は調査を重ね、ついにA5判で六百ページの大著を完成した。索引項目だけで2000を越える綿密な生活誌である。しかも、この本が出来上がった時、この人はかぞえて81歳になっていた。(略) 近代沖縄で最も開明な女性の一人と言ってもいい。本書は、住居・居・食・人の一生・年中行事の五編からなり、それぞれについて微に入り細にわたって具体的な記述が並んでいる。(略) 日々の具体的な姿や、祝いの席の献立の説明、そこで唱える祝詞、わらべうたの歌詞とメロディーなどである (以下省略)⁽⁷⁾。いかに労作だったか、池澤の書評から読み取れるのではないだろうか。

宮城文は、1990（平成2）年2月4日、98歳でその生涯を閉じた。

【表1】宮城文（みやぎ・ふみ）略歴

年	和 暦	年齢	略 歴
1891年	明治24	誕生	八重山郡石垣町字登野城に生れる（11月28日）
1911年	明治44	19	沖縄県立高等女学校卒業
1911年	明治44	19	登野城尋常高等小学校（現・登野城小学校）代用教員として勤務
1913年	大正2	21	同校準訓導
1914年	大正3	22	宮城信範と結婚（1月）。字新川に居住
1914年	大正3	22	白良尋常小学校（現・白保小学校）に転勤。1日で退職
1915年	大正4	23	夫・信範の新城（あらぐすく）尋常小学校（新城島）転勤に同行 新城小学校で代用教員として勤める
1917年	大正6	25	夫の黒島尋常小学校（黒島島）転勤に同行、文も同小学校で準訓導として勤務
1920年	大正9	28	夫の石垣尋常高等小学校転勤に同行、石垣島へ帰島。教員退職
1921年	大正10	29	石垣尋常高等小学校に復職
1933年	昭和8	41	同小学校退職
1944年	昭和19	52	台湾に疎開
1945年	昭和20	53	石垣島に帰島
1948年	昭和23	56	石垣市議員選挙に立候補。初の女性議員として当選。1期4年勤める。
1949年	昭和24	57	みやまえ幼稚園の初代園長に就く
1963年	昭和38	71	みやまえ幼稚園園長退職。東京に居を移す。『八重山生活誌』の執筆構想を練る
1965年	昭和40	73	『八重山生活誌』出版の調査・執筆に取り掛かる
1966年	昭和41	74	石垣市へ帰郷。すぐに那覇市に居住
1972年	昭和47	80	『八重山生活誌』（沖縄タイムス社出版）上梓
1973年	昭和48	81	第一回伊波普猷賞受賞
1990年	平成2	98	生涯を閉じる（2月4日）

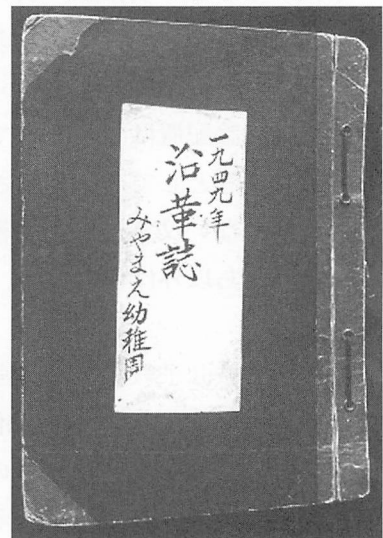
Ⅲ. 「みやまえ幼稚園沿革誌」

『みやまえ幼稚園沿革誌』の原本は【写真2】、宮城文によって書かれた毛筆による直筆の記録であり、貴重な第一次史料である。

『沿革誌』は、宮城が記録した1949（昭和24）年4月11日から1963（昭和38）年3月12日まで書き綴った、みやまえ幼稚園の足跡であり、24,000文字に及ぶものである。（『沿革誌』によれば、退職日を1964年3月12日と記しているが、1963年の誤記と思われる。それは、前後の日付や文脈から判断でき、「控え」として宮城が別記している沿革誌には、1963年と書かれている）

本研究の眼目である『沿革誌』の解説は、宮城が記録した在職期間の幼稚園経営、運営、保育実践を、この第一次史料からつぶさに読み取ることによって、当時の幼児教育の実情を可能

【写真2 沿革誌表紙】



な限り把握し、まとめることである。

尚、原文の全文を、筆者が書写し本論文の巻末に記載したが、以下、論文中の引用によるアンダーラインは、筆者によるものである。(巻末『みやまえ幼稚園沿革誌』は縦組みで85ページから読みたい)

1. 幼稚園設立について

『沿革誌』冒頭の記述に、宮城の並々ならぬ幼稚園教育への意気込みが窺い知れる。【写真3】

「字新川では幼児教育の必要に迫られながら種々の都合で幼児教育機関設立の実現を見る事が出来なかった。それで一部の児童が遠くヤエヤマ、みやとりの両園に通っていたが、みやとり幼稚園児童数が収容限度を越えるようになり新川は字として幼稚園設立を急がなければならない窮地に迫った。そこで字民の要望により字会長佐久真長助が中心となられ11人の設立委員が立ち上げられて設立準備が進められ1949年3月17日認可となった。(略)同年4月11日設立開園を実現する事が出来た。創立はしたものの資金を初め何一物もない文字通りの真裸であった。(略)設立者の嫁に当る佐久真スエ、園長次女宮城弘子の兩人を保育に採用して字民と共に会館の設備物心両面に協力方を御願い

【写真3 沿革誌冒頭文】



して89人の幼児を育てる大決心をしたのである」。みやとり幼稚園児童数が収容限度を越えるようになり、という記述に着目して見よう。当時のみやとり幼稚園の就園児数を確認すると、開園時の1947(昭和22)年は131名、1948(昭和23)年は120名、1949(昭和24)年は175名、1950(昭和25)年は106名となっている⁽⁸⁾。

みやまえ幼稚園は1949(昭和24)年の開園時に89名、1950(昭和25)年は66名、1951(昭和26)年には45名、1952(昭和27)年は113名で急激に増え、それ以降は年々増加し、ピーク時となった1956(昭和31)年は、195名に達している。

原文のみやとり幼稚園の収容が限度を越えるという箇所は、おそらく、みやとり幼稚園入園数、1949年の175名を指しており、翌年は、みやまえ幼稚園開園の奏効で、みやとり幼稚園も106名と減少している実態から、宮城の記述は実証できる。膨大な園児数にも拘わらず、当時の幼稚園教諭配置は2～3名であり⁽⁹⁾、教諭はかなりの職務過重負担であったことがわかる。

開園設立者として名前が記されている佐久真長助は、字会長であり、元校長であった。

何一物のない文字通りの真裸、いう強烈な表現は、『沿革誌』や他の記録でも述べられており、園児たち以外は何もない、という一から保育環境を整える劣悪な教育環境だったことが窺える。

また、宮城弘子教諭とは、宮城の次女で、前職はみやとり幼稚園の教諭であったが、母親のたつての願いで、みやまえ幼稚園開園に協力したと思われる。1949年の設立名簿に記載されている「宮城信範」は宮城の夫であり、「宮城信勇」は二男で、開園当初の委員や園舎の土地を巡る支援など⁽¹⁰⁾、みやまえ幼稚園の運営に、陰になり日向になって携わっており、宮城一家総出で園の運営に協力していることが窺える。

2. 園舎と園庭

みやまえ幼稚園の園舎、園庭が、地域信仰の場であるマイチバー御嶽（うたき）の敷地を利用して開園されたことは『沿革誌』に記述されている通りであり、園舎の所在地は、「マイチバー御嶽字青年会館」で、運動場100坪は、「マイチバー嶽庭」である。みやまえ幼稚園と同様に、戦後まもなく開園されたみやとり幼稚園の場合も、「みやとり御嶽」の敷地を、また、昭和38年（1963）に開園した天川幼稚園は、「登野城糸数御嶽」の敷地を利用して園舎、園庭が作られ、開園に到っている。

そのことは、信仰の布教目的や、宗教的使命感から御嶽が幼稚園運営に積極的に関わっているのではなく、単に、御嶽の敷地が地域の青年会活動等の集会場として利用されていた経緯や、地元有志の影響力で同意が得られやすい環境にあったからに過ぎないのだろう。

このように、地域の御嶽が幼稚園設立に寄与し、園舎や園庭に使用される例は、おそらく八重山地域にのみ見られる実例かも知れない。筆者は、みやとり幼稚園を卒園しているが、鳥居が校門であったことを鮮明に記憶している。

しかし、御嶽の幼稚園への貢献度は、園の運営に有用性をもたらしている一方で、反目する場面もしばしば見られる。

1954年度年3月9日の記述によると、「水道は完成したが嘉数カマンガーから神の通り道になっているからとても悪いとお叱りを受けてがっかりした。園長としては狭い敷地で出来るだけ場所をとらないようにとの考えであり、なお豊年際の暑き最中の行事などには道にも水を撒いたり綱引の人々にも水を利用して貰ふなど年1回の社会奉仕もという気持ちで…」とあり、園の水道工事を巡って御嶽側から神罰云々のお叱りを受け、場所を移動することを

【写真4 園庭にて第一期卒園式(1950)】



余儀なくされた経緯がある。また、1955年度4月6日の記述には、「マイチバー嶽の庭を遊び場にすることを禁止される。字有志の協議により認可申請にも運動場マイチバー嶽境内100坪として認可されたので当然使用权あるものとして遊ばしているのに神司故にだしぬけに禁止を命ぜられて全く当惑、何という情けない事だらう。（略）神崇拜の精神教育にも努力しているのに（略）貧乏幼稚園に神さまは恵みの手を伸ばせて守っては下さらぬかと固唾を呑んで泣寝入りする他なかった」と、御嶽の庭で遊ぶことを神詞として禁止を命ぜられたりして、涙ぐみながらも、ついに、運動場を他に移転する事を余儀なくされている。「眼前に空いている嶽の境内や木陰をうらめしそうに眺めながら園長先生あそこで遊ばしてという児の言に涙ぐむ事も何度かあってとうとう運動場を借りる事に決心したのである」⁽¹¹⁾と心情を吐露し、その無念さが、『沿革誌』の記述からも汲み取れる。私心を忘れ、奉仕精神で保育に身を置いている宮城や教諭たちにとっても、遊び場を奪われた園児にとっても、悲しい現実だったに違いない。

また、園舎が地域の「青年会館」を活用して設立している園は、みやまえ幼稚園以外に、「みやとり幼稚園」、「やえやま幼稚園」、「わかば幼稚園」（在川平）、「みやなが幼稚園」（在宮良）などに見られる。

1. 保育実践

(1) 年間行事について

①幼稚園の行事、②地域行事と関わる行事、③米政府下の行事、④八重山地区の教育的な行事、さらには、⑤園外の文化行事として分ける事が出来るだろう。

①幼稚園の行事として、4月の入園式、5月の子どもの日、母の日、7月の七夕まつり、9月の老人の日、10月の運動会、秋の遠足、1月は元旦の新年式、1月または2月の学芸会（1951年度以降は、2月または3月の演芸会）、3月は修了記念遠足、修了式がある。1949年度5月2日の記述に、「鯉幟掲揚 職員手製の紙鯉幟ではあるが、勇ましく涙ぐましいと思った」と感想を述べている。宮城は、毎年、5月5日の子どもの日には、柏餅を差し入れている。また、4月の入園式の後は、父兄会を開き、役員改選や1年の保育予定、早急に取り組む課題について協議しているが、多くは、幼稚園の環境整備に伴う事項が多い。運動会では、自前の運動場を所有していないことから、石垣中学校、石垣小学校と運動会を連合で行なっている。幼稚園の揺籃期においては、小学校や地元有志が物心両面にわたって支援し、物資不足時の助け合いで幼稚園運営が成り立っている。

②地域行事は、5月の花祭り（桃林寺見学）、爬龍船（当日は休園）、豊年祭、16日祭などである。花祭りは、仏教の教えを学ぶ日であり、筆者も桃林寺に友人と連れ立って出かけ、甘茶をいただいたものだった。（1952年度5月1日記述：桃林寺の花まつり見学甘茶を全児童に飲ます）

爬龍船とはハーリーのことであり、沖縄本島糸満から移住してきた人達によって八重山に広められ、定着したと考えられる。幼稚園のみならず、小・中・高校も休校となるほど地域行事としては、大掛かりなものだった。筆者の記憶では、爬龍船の日に間に合わせて洋服を新調したものだったが、いわば、正月のような祝日であり、八重山経済を潤した行事の一つであったのだろう。

③米政府統治下の行事としては、まず、7月4日の米国独立記念日があり、園は休園になっている。また、9月4日の労働祭でも休園となっている事から、米国の祝日は休園日だった事がわかる。また、米琉親善試合や、軍政府からの支給物があり、1952年度12月23日の記録では、「イトン氏よりチューインガムのプレゼントがあった。記念運動場に集合させて飛行機よりサンタクローズ（ママ）が下りてきてそれら幼稚園にチューインガムを手渡しする風景はさながら天使のようですばらしかった。園児等は本物のサンタクローズと信じ切っているようすばらしく興味深く感じた」と述べている。このように、米政府による行事関連の支給物や、石鹸のような日用品、リーダーズダイジェストのような月刊誌の配給もあったことがわかる。

④八重山地区の教育的行事としては、2月17日のペスタロッツ祭があるが、八重山全体の教員達の研修日であり、幼稚園も毎年休園日であることがわかる。この行事は教育祭として現在も続いているが、このことは、別項で述べたい。

⑤園外の文化行事の一つに、童話コンクールがあげられるが、これは、八重山地域の幼児、児童、生徒が競う童話コンクールであり、石垣市登野城所在の琉米文化会館を会場に行なわれている行事である。

二つ目は、園児を引率して、たびたび映画鑑賞へ出かけていることである。1956年度12月11日の記述では、「文館⁽¹²⁾で映画鑑賞」、1月19日は「丸映館で“亡びゆく大草原”見学」、3月4日は「遠足の予定でしたが、悪天候のためそのままバスを丸映館に向け、映画見学と誕生会に変更した」、1959年度5月19日は「映画見学…文館」とある。このように、映画鑑賞を保育の一環として取り入れていることがわかる。また、1952年5月18日母の日には、「石垣市婦人会主催の母の日に遊戯出演」とあり、地域の文化活動に園児が参加し演じている。

（2）保育内容について

保育内容の実践については、まず、『戦後八重山教育のあゆみ』⁽¹³⁾ から見てみよう。宮城談話で次のように記されている。「保育実際として音楽、遊戯、童話、紙芝居、工作などでした。何しろ物のないときですから、工作材料は、すぐ入手できる郷土の材料、たとえばソテツ、アダン、粘土、砂・貝殻、石、草木など利用しました。童話、紙芝居は郷土の童話、昔物語りから、遊戯、音楽も郷土のものをアレンジして、教育の郷土化を強調いたしました」（宮城談）

この記述からもわかるように、素材や教材は、生活の身近にあるものを使い、創意工夫を行っている。物のない時代だからこそ教育で最も大切な子ども達の好奇心、意欲、創意工夫、想像力を育む保育指導が取り組み易かったかも知れない。教育の郷土化についても強調しており、宮城の教育方法論が読み取れる。

また、音楽活動については、『沿革誌』に記述があり、当時の音楽教材や園児たちの保育活動が見て取れる。音楽は季節に因んだ歌が歌われている。七夕の歌合唱、鯉幟の歌、お猿の野球、おとぎおんど、日の丸、凧の歌合唱、ひなまつりの歌などであるが、運動会行事のための音楽教材として、1962年11月4日の記述に、「八重山の童歌9種類組み合わせ振りつけしての行進は大好評であった」とあり、同日、「教育委員会創立10周年記念祝賀会に幼稚園代表としてみやまえ幼稚園の八重山童謡の演技とお猿の野球出演す。これもまた大好評を受けた」とある。

おそらく、宮城のアイデアによる音楽指導ではないかと推測できる。というのも、宮城の孫の宮城信博氏は、幼い時のことをこのように述懐している。「祖母が八重山のわらべ歌に振り付けを創作し、それをよく歌ったり踊らされた。それも、運動会や学芸会の前日で、創作がうまく合わない部分は修正して完成させていた」と話した。また、運動会の入場曲には八重山民謡の「とまた節」を使い、退場曲には「川良山節」を教材化し、宮城がオルガンで演奏して、保護者や園児たちに好評だったことも語った。宮城はこのように、郷土音楽を活用し、自身の創作を折り交ぜて音楽を教材化していたことがわかる。

（3）健康と衛生面の取り組み

健康管理面で興味深いのは、『沿革誌』の1949年6月26日、海人草（かいにんそう）の服用記述から、当時の衛生面を窺い知ることができることである。『ナツコ 沖縄密貿易の女王』⁽¹⁴⁾ では、当時の八重山の状況が緻密な調査のもとに記されている。その中で「（略）終戦直後の日本では、国民の9割に回虫が寄生していたといわれ、日本を占領した米軍はこれに驚いて駆除に乗りだしたが、このとき使われたのが海人草だった。この海草を煎じた生薬は、サントニンが普及する1950年代中頃まで回虫駆除の主役だった」⁽¹⁵⁾、「海人草採取（実際は密貿易）は当時の八重山では重要な産業だった」⁽¹⁶⁾と記されている。その後、海人草採取は産業として廃れていくが、その背景に、戦後復興期の経済政策も一因としてあげられる。牧野浩隆著『再考沖縄経済』によると、「当時、地元の製造業を復興しかつ輸出産業を育成するための為替レートは、黒砂糖が500円、カツオ節250円、海人草300円など、“B円安”にしなければならないとみられていた。しかしながら、米軍当局は、基地建設・インフレ防止の見地から、輸入価格抑制のためには《輸出産業の育成を考慮する必要なし》とさえ言い切っていた」⁽¹⁷⁾。つまり、経済秩序の回復した正規ルートの貿易では海人草採取は産業として成り立たず、密貿易の衰退とともに廃れたのであろう。

いずれにせよ、1954年度3月のみやまえ幼稚園の水道工事完成までの間、劣悪な衛生環境の

改善に、密貿易によって八重山に多量に流入した海人草を煎じて全児童に服用させた健康管理の苦勞が窺える。海人草服用について、『沿革誌』の記述は1954年度6月にも記されているが、その後の記述はなく、健康管理面は、「ジフテリア注射、マラリヤの採血検査、ツベルクリン注射、保健所の医者による身体検査、チブス予防注射」と保健所を中心とした内容に変わっている。1953年度5月8日の記述によると、「保健所で検査を受けたが驚いて逃げる子、泣く子、うんこたれる子などいて大へんでした」と園児たちの対応に苦慮している様子がわかる。

このように、健康管理面での整備は、物資が豊かになるにつれ保健所の活用へ切替される経緯が読み取れる。

(4) 教育祭 (ペスタロッツ祭) の実施

教育祭とは、スイスの教育者 J. H. ペスタロッツ (1746~1827) の命日である2月17日に因んで開催された、八重山地区教育会の行事であるが、その立ち上げは、八重山のみではなく全国的なものでもあった。しかし、八重山の教育会が1948 (昭和23) 年に本格的に立ち上げ、毎年2月17日にペスタロッツ祭として実施、教員の研修日として現在まで続いている例は、極めて珍しいケースではないだろうか。

特にペスタロッツは八重山の教育に重要な意味付けを持つことが、『沿革誌』からも窺える。

みやまえ幼稚園では、1949年設立時から、いち早く教員の研修日として実施されており、1949年度2月17日の記述では「教育祭 休園」、1952年度2月17日は「ペスタロッツ祭に付き休園」、1960年2月17日は「教育祭に職員参加 丸映館に於いて」とある。記述が見られない年度もあるが、教員の研修日としてペスタロッツ祭は、ずっと定着しているものと考えられる。

八重山のペスタロッツ祭は、ペスタロッツの教育理念を学び、教育者の資質向上を図る目的で実施されており、開催第1回の1949年から2007年の第59回に至るまで、1度の中断もなくペスタロッツ祭が続いている。⁽¹⁸⁾

物資不足の中で「貧民教育の父」とも言われるペスタロッツの教育論が八重山に根付いた背景が、『沿革誌』の中に如実に表れており、興味深い。筆者自身、八重山で生まれ育ち、学校教育の中で教師からペスタロッツの話聞いた覚えがあり、意識の深層に受け継がれているのが実感できる。

そのことについては、八重山の地域特性として幼児教育の側面から、地域に連動した教育の視点で、詳しく触れる必要があるだろうが、後続の研究に譲りたい。

2. 幼児音楽教育の実践

宮城が登野城尋常高等小学校の勤務で長包と同僚だった期間は、わずか3年間であるが、後の宮城の人生や仕事に大きな影響を与えたといえるだろう。

宮城は、長包について自ら文章に記している。少々長い宮城の記述を引用する。

「先生とのご縁は、明治44年4月登野城校に就任した時が初まりでございます。当時登野城校は県下一の優良教員揃いとされている中に、先生は第3席でいらっしゃいました。各学年の学級担当が発表された時、尋一男子担任宮良長包、同女子担任大浜文との記事を見て全く驚きました。評判のベテラン訓導先生と女学校卒業したばかりのほやほや娘の代用教員とのコンビはあまりにも無茶に思えて、しきりに辞退したが四国生まれのきびしい久保田校長は強引に《大丈夫だ。やってみなさい》といいすてるばかりでした。長包先生はやさしく《私が教えて上げるから心配しないで》と、私の手を握って皆の前でこの通りですと激励して下さいました。

周囲の先生方も拍手でがんばれと応援して下さいました。

私は教案の書き方、教授法まで手解きをしていただきました。（略）先生の手振、身振、語声の高低、強弱、遅速等での表情と話術の巧みさは幼学年の担当として天下一品だと感心するばかりでございました。先生のお蔭様で私も、1年担当適任者として鍛えられて、ついに退職まで1年担当で通してきました。

実に先生は、私の素地を引張り伸ばして下さいました恩人でございます。殊に幼稚園長としての経営は、ひとえに先生の訓育のたまものと今もって感謝一杯でございます。」⁽¹⁹⁾

特に、最後の文章で、「みやまえ幼稚園経営は先生の訓育のたまもの」とはっきり述べており、先述した教育の郷土化を強調している教育観は長包からの影響も大きいだろう。

また、『八重山生活誌』の巻末に、八重山のわらべうた25曲を取り上げ⁽²⁰⁾、楽譜と歌詞、註釈を加え、記載している。並々ならぬ郷土音楽教育への意欲が見て取れる。実践的な面では、八重山のわらべ歌を取り入れ発表したり、郷土音楽の重要性を強調しながら、保育実践に導入していったことは、宮良長包も郷土音楽を重要視して実践した共通点があり、その音楽観による影響もあったのではないだろうか。

宮城信勇氏は、「母は八重山の郷土音楽を積極的に実践していた。大和（本土）の文化に目が向けられていた当時に、あえて、八重山のわらべ歌や八重山民謡を取り入れていたことは、先見の明があったのではないか」と話した。

「みやまえ幼稚園50周年誌」で卒園児の回想録を見てみよう。「（略）運動会のお遊戯で思い出すことがある。それはなんだか勝手が違っていた。《オーフオーフ、ダーガダーガ…》お遊戯の曲の歌詞を今も覚えている。《ウティリヨー ジンジンパリ…》ふつうイメージするお遊戯の歌とは少しちがっていて、なんだかいやだなと私は思った。《カモメの水兵さん》とかスマートなお遊戯を期待していたから、裏切られた思いでいっぱいだったが、これが八重山に伝わるわらべうたのメドレーだと気付いたのはずいぶん後になってのことだった。いまこそ郷土の文化が見直されているが、当時は大和文化を追いかけていた時代である。そんな時代にもしっかり地に足がついた教育を試みた先生がいらっしゃったことは驚きであり…」⁽²¹⁾

また、『沿革誌』の1950年度8月の記述で、「園歌及びオイモチャン歌製作」とある。この、「オイモチャン」がどんな曲なのか、関心を持って調査を進めたが、楽譜や資料が存在せず、開園当時のゆかりの方々を訪ねてみたが、中々手掛かりがつかめず諦めかけていた。ところが、幸運にも、宮城信博氏が記憶を辿りながら歌唱し、録音・採譜にこぎつけることができたのである。【楽譜1】

【楽譜1】

オイモチャン

作詞 宮城信勇 歌唱 宮城信博
作曲 外間永律 録音・採譜 大山伸子



こ ろ りこ ろこ ろ た んと でた



な がい のま るい のお ーき ーの



い もほ りて つだ いう れし いな み ん



な ー のお すき なお いーも ちゃん

録音：2007/12/23

のか、関心を持って調査を進めたが、楽譜や資料が存在せず、開園当時のゆかりの方々を訪ねてみたが、中々手掛かりがつかめず諦めかけていた。ところが、幸運にも、宮城信博氏が記憶を辿りながら歌唱し、録音・採譜にこぎつけることができたのである。【楽譜1】

この「オイモチャン」の曲について、作詞者の宮城信勇氏は、「当時は、オイ

モが主食であったが、とても小さなオイモしか収穫できなかった。それでも、命をつなぐ有難い食料だったので、子ども達にはオイモがいただけることに感謝して歌って欲しかった」と、遠い記憶を呼び戻すかのように回想した。

戦後の復興期において、食料難にありながら、道德教育を歌を通して教授するという目的が込められた歌だったのである。

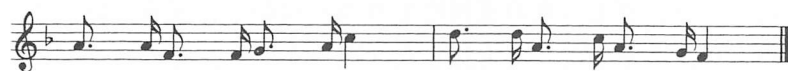
また、宮城信博氏は、幼稚園でよく歌ったという、「おとうさんのひるね」(『沿革誌』1952年度

【楽譜2】 おとうさんのひるね

作詞 不明 歌唱 宮城信博
作曲 不明 録音・採譜 大山伸子



おっ とさ まめがね めがね かけ のぞい てみたら



わ たし のゆ めが わ たし のゆ めが

録音：2007/12/23

5月18日記述：宮城信博他7人 おとうさんのひるね(演ず)も記憶を辿って歌ってくださり、貴重な楽譜化が実現できたのである。【楽譜2】

宮城が施した音楽実践の具体的な記録は殆どなく、それらを解明するには、このように、記憶して歌える方を訪ね当て、歌唱する曲を採譜して

楽譜化する手立てを地道に実行することが、現在のところ最良な方法であるが、資料の掘り起しなど、今後の研究課題としたい。

IV. まとめ

戦後復興期は八重山群島政府の設置(1950年)など、沖縄本島とは異なる政治経済圏を有しており、特殊な状況下にあった。

このような貧困な経済環境下で、物資不足、教材不足、教員不足等、手探りの教材揃えや自前で教員を養成しなければならなかった状況から、八重山の教育体制構築の苦労が見られる。⁽²²⁾

また、みやまえ幼稚園の『沿革誌』においても、これらの実情が随所に現れ、戦後復興期の幼稚園制度の変遷が見て取れる。

まず、開園時の保育環境であるが、地域の住民や篤志家によって立ち上げたものの、無一文状態で発足、教材教具は、保護者や地域住民の厚意によってまかなわれ、椅子、テーブル、ブランコ、スベリ台の用材、絵本にいたるまで、すべてが寄贈によるものだった。絶えず、行政へ財源や物資の援助申請に足を運んだり、陳情書を提出したり、宮城が幼稚園で勤めた14年間は、常に物資支援を嘆願することとの闘いであったといっても過言ではない。宮城の記述の要所所には、保護者への奉仕活動に関する感謝の気持が述べられている。

また、行政も八重山群島政府から米軍政府と切り替わり、米国の祝祭である労働祭、独立記念日も子ども達の園生活の中に取り入れられていた。細かな資金記録もあり、B円からドルに切り替わる状況や、米国による物資の支援も見て取れる。

【写真5 現在の園舎(公民館と複合)】



極貧の園の財源であったが、何とか運営されたのも、篤志家の寄付や保護者の奉仕活動があればこそ日々の子どもの園生活が確保でき、また、宮城をはじめ、幼稚園教育に労苦を厭わなかった幼稚園教諭の奉仕精神が支えたといっても過言ではない。この現状は、みやまえ幼稚園のみならず、他園にも同じことがいえるだろう。

このように、貧しい財源で私立園として開園した「みやまえ幼稚園」だが、昭和29年に公立幼稚園として認可がおりることになった。しかし、補助金体制は一向に改善されなかった。1961年度11月14日の記述によれば、「当園長はみやとり翁長⁽²³⁾と、名実ともに公立幼稚園としての運営を願い出ようという相談をしてそれをやえやま幼稚園長牧志つるえ氏にも同行動し協力して欲しいと話しかけ3園長は教育長事務所並に中央教育委員訪問」とあり、名実ともに公立幼稚園として、というくだりが切実である。

とはいえ、日々の保育環境は整えなくてはならず、地域特性による御嶽をめぐる葛藤、保育実践の充実化、保健・衛生面の整備と課題山積の状況を乗り越えながら、14年の幼児教育を全うしたのである。

みやまえ幼稚園に通りの環境が整ったという確信を持った心情を吐露した記述がある。1962年度12月13日、「10割ボーナスを初めて支出する事が出来て涙ぐましい感謝で一杯でした」、1月21日記述には、「みやまえ幼稚園は他幼稚園とは異例で無一物真裸で創立されたので、これまで久しい間に設備二に設備で設備面に努力して職員には尊い犠牲を仰ぎ薄給で奉仕していたので心苦しい思いで同情していたが現在では一通りの設備は内外とも最低限度まで整ったのでせめてこれからでもと職員の優遇方に努力したのであった」と記述されており、教員の待遇面の改善を見定めた宮城は、3月12日に幼稚園を去ることを決意したのである。

『戦後八重山教育のあゆみ』によると、宮城文の談話として、次のような記述箇所がある。

「敗戦直後の社会情勢、住民の生活苦はお話しにならないほどでした。それにもかかわらず、幼児教育の重要性が住民の間から強く打ち出され、園設立の機運が高まり、開園の運びとなったのです。ところが、いざ開園ということになって、園舎、保母、運営費という問題にぶつかり、全く無一物から出発せざるを得ないので途方にくれました。園舎は、爆撃でボロボロになった新川会館⁽²⁴⁾を、宇民の奉仕によって大修築して、目鼻がつけました。備品も何一つなかったのですが、腰掛は唐真太郎さんに寄贈してもらいました。教卓・オルガン・小道具は家から持ち込みました。その後、P・T・A有志の篤志によって遊具、教具《職員の創意による製作も含めて》、放送用具まで備えることができました。」⁽²⁵⁾

宮城の幼児教育者としての14年の歳月が、ひしひしと伝わってくる一文である。

V. おわりに

本論文では、『みやまえ幼稚園沿革誌』という貴重な第一次史料を解読し、当時の八重山における幼稚園の実情や保育実践を明らかにしたが、戦後復興期の八重山の幼稚園教育も明確に見えてきた。さらに、八重山の幼稚園教育を鳥瞰するためには、引き続き、八重山の他の幼稚園についても継続研究することが必要であろう。そうすることで、点が線になり、多くの保育実態が解明されることとなろう。今後、八重山における幼児の音楽教育についても、意欲的に取り組みたい。

【謝辞】

本研究に当り、『沿革誌』の資料をご提供下さった、石垣小学校校長・みやまえ幼稚園園長の花城正美先生、宮城文と親交があり、みやまえ幼稚園の出身でPTA会長も務めた、石垣市副市長・黒島健氏、石垣教育委員会の松島昭司教育部長、池田哲子幼稚園教育指導主事、資料提供にご協力下さった当真政光氏、みやまえ幼稚園の上原さとみ教諭、翁長信全元みやとり幼稚園園長の長男信夫氏をはじめ、石垣市立図書館、沖縄県立図書館、沖縄県立図書館八重山分館、那覇市立図書館、石垣市教育委員会、自費出版ライブラリー、石垣市市史編集課、沖縄キリスト教学院図書館に深く感謝申し上げる。

宮城文の二男である宮城信勇氏、夫人の貞子さんには、生前の宮城文について貴重なお話や資料を提供いただき、孫の信博氏には、「オイモちゃん」、「おとうさんのひるね」を歌唱していただき、本論文執筆の大きな推進力になりましたことを、心からお礼申し上げます。

【資料提供】

みやまえ幼稚園：『みやまえ幼稚園沿革誌』、写真1と4(原版)、2と3(原版複写)

【注】

- (1)『現代沖縄人物三千人 人事録』(沖縄タイムス社、1966年)、711頁。「八重山毎日新聞」(1979・7・14)
- (2)『みやまえ幼稚園沿革誌』は、3通り存在する。本文で取り上げた宮城文の毛筆による記録の他、「控」と記した大学ノート記述と、毛筆によるやや整理された内容の沿革誌がある。いずれも宮城の記録。
- (3)宮城文著『八重山生活誌』(沖縄タイムス、昭和47年)
- (4)宮良長包(1883~1939)石垣間切(現・石垣市)生まれ。沖縄師範学校を卒業し、県内の尋常高等小学校、師範学校音楽教諭として第一線で活躍。生涯に「安里屋ユンタ」「えんどうの花」など169曲(現在までに判明)の作品を遺した音楽教育家、作曲家
- (5)『市民の戦時・戦後体験記録 第2集—あこのころわたしは—』(石垣市史編集室 昭和59年) 85~94頁
- (6)池澤夏樹著『読書癖3』(みすず書房、1999年)
- (7)(6)に同じ、14~16頁
- (8)『戦後八重山教育のあゆみ』(石垣市教育委員会・竹富町教育委員会・与那国町教育委員会、昭和57年)、632~633頁
- (9)(8)に同じ。632頁
- (10)1955年度5月2日、1956年度3月15日記述
- (11)1955年度4月6日記述
- (12)「八重山琉米文化会館」のことで宇登野城所在。米国民政府渉外報道局が直轄する文化機関で県内は5カ所に設置された。
- (13)(8)に同じ、627頁
- (14)奥野修司著『ナツコー沖縄密貿易の女王』(文藝春秋、2005年)
- (15)(14)に同じ、79頁
- (16)(14)に同じ、84頁

- ⁽¹⁷⁾ 牧野浩隆著『再考 沖縄経済』(沖縄タイムス、1996年)、28頁
- ⁽¹⁸⁾ 八重山毎日新聞、2007年2月18日
- ⁽¹⁹⁾ 宮良長包先生顕彰記念誌『ふるさとの歌心よ永遠に』(宮良長包生誕周年記念事業期成会、昭和58年)、36～39頁
- ⁽²⁰⁾ (3) に同じ、629～656頁、砂遊び(1)、砂遊び(2)、砂遊び(3)、おーせーばんのカニマーチャ、雨、男の子と女の子、赤ちゃん坊主、そーろんがなし(盆の祖霊)、はいぬしまぼー(南島棒)、おーふだーが(さしば)、いばっち、数え歌、山みだぐ、じんじんばーれー(ほたる)、あーらやーぬよい(新築祝)、牛のばんぞーれぞーれ、ぴゃしよーにんずるこー、夜の子守歌、昼の子守歌(1)、昼の子守歌(2)、昼の子守歌(3)、数え歌、童歌まき踊り遊び、シッサムージ アカムージ(蓮芋、唐芋)、雨乞いの歌、以上25曲の楽譜、歌詞、注釈が記載
- ⁽²¹⁾ 『創立50周年記念誌』(石垣市立みやまえ幼稚園、平成11年)、55頁
- ⁽²²⁾ (8) に同じ
- ⁽²³⁾ 翁長信全(1893=明治26～1980=昭和55) 長男信夫氏から聞き取り。第2代みやとり幼稚園園長(在職1955～1961)『創立50周年記念誌みやとり』(平成8年、90頁)。石垣町(市)長(在任・昭和19年8月～昭和23年3月)『八重山写真帖 上巻』(石垣市、2001年)、278頁
- ⁽²⁴⁾ 「マイチバー御嶽青年会館」は、現在「新川公民館」に改称
- ⁽²⁵⁾ (8) に同じ、627頁

【参考図書・文献】順不同

1. 宮城文著『八重山生活誌』(沖縄タイムス社、昭和47年)
2. 宮城信行『かじまやー太平記 祖母 宮城 文』(私家版、昭和62年)
3. 『創立50周年記念誌 みやまえ』(石垣市立みやまえ幼稚園、平成11年)
4. 『百年誌 石垣小学校』(石垣小学校創立百周年記念事業期成会、昭和57年)
5. 『やえやま幼稚園—50年の歴史』(やえやま幼稚園創立50周年記念事業期成会、昭和59年)
6. 『登野城小学校 百年のあゆみ』(登野城小学校創立百周年記念事業協賛会、昭和56年)
7. 『登野城小学校 創立百十周年記念誌』(登野城小学校創立百十周年記念事業実行委員会、昭和56年)
8. 三木健著『八重山研究の人々』(ニライ社、1989年)
9. 三木健著『八重山を読む』(南山舎、2000年)
10. 村山拓「占領下八重山における教育とペスタロッツチ祭に関する考察—第1回ペスタロッツチ祭の企画、開催経緯に注目して—」(『千葉経済大学短期大学部研究紀要第3号』、2007年) 55～67頁
11. 田口仁久訳『ペスタロッツチ—幼児教育の書簡』(玉川大学出版部、1983年)
12. 片山忠次著『幼児教育思想の研究』(法律文化社、1984年)
13. 日本ペスタロッツチー・フレーベル学会編『ペスタロッツチー・フレーベル事典』(玉川大学出版部、1996年)
14. 関口博子『ペスタロッツチと音楽教育—そのゆかりの地を訪ねて—』(榊民衆社、1997年)
15. 『沖縄の戦後教育史』(沖縄県教育委員会編・発行、昭和52年)
16. 『沖縄の戦後教育史—資料編』(沖縄県教育委員会編・発行、昭和53年)

17. 『戦後八重山教育のあゆみ』(石垣市教育委員会・竹富町教育委員会・与那国町教育委員会、昭和57年)
18. 喜舎場勤子「沖縄県の幼稚園設立とその基盤形成に関する一考察—ヤエマ幼稚園の事例を中心に—」(沖縄教育研究第5号、1998年)、11～18頁
19. 「結成30周年記念 やえやま保育—実践集1—」(八重山保育士会、2000年)
20. 『創立50周年記念誌 「みやとり」』(創立50周年記念事業期成会、1995年)
21. 「石垣市の教育—平成10年度版—」、9～18、42頁

する事が出来て涙ぐましい感謝で一杯でした。
一月七日 電球のソケットがもぎとられていた。

一月廿一日 職員一人当り四弗増俸で支給す。仲座三十三弗 安里三十一弗 石嶺二十九弗 園長二十弗

増俸の理由 みやまえ幼稚園は他幼稚園とは異例で無一物真裸で創立されたのでこれまで久しい間に設備に設備で設備面に努力して職員には尊い犠牲を仰ぎ薄給で奉仕していただいていたので心苦しい思いで同情していただいていたので心苦しい思いで同情していただいていたので心苦しい思いで同情していただいていたので心苦しい思いで同情して

一月廿四日 アンブ修理を新垣隆宏副会長に奉仕して貰った。
一月廿九日 午後四時から評議員で演芸会舞台装置をして貰った。

二月一日 第十四回演芸会
午前九時半開始十二時過閉会。とても上出来で好評を受けた。舞台は明日の為そのままにして明日の使用に向けた。

二月二日 他字に嫁した新川婦人招待の行事を挙げる。会館建築資金として寄付の責任を負いそれぞれの方から相当額の寄付を受けて字会長に納入した。寄付を仰いで回り落成祝には上席にして喜んでいただきますと口約束したような御礼の言葉を申し上げておきながら落成後七ケ年になる今日まで落成祝も催されず心苦しくすまない恩で時にはお詫を申し上げたりしていたので思い切つて幼稚園主催という名義にして新川公民館の新築寄付者他字に嫁した婦人の感謝会(落成祝)を持ったのである。

一、招待客の寄付は受けぬ事

一、招待客の料理其の他の費用は園長の負担とする。

一、PTA父兄及び有志婦人は一品携帯して協力して貰う事

一、余興は幼稚園児と父兄の演技以上で盛會裡に終り、永年の不義理を果す事が出来たので喜びあった。

二月三日 午前十時文教局から赤嶺先生幼稚園調査に来園

二月三日 午後から教公二法案反対運動デモ行進に参加、午後七時半から赤嶺先生の歓迎会に職員参加

二月十日 遠足 終了記念遠足を崎原公園までバスで二両借切で行く。遠足先で誕生会を十二時から持つ。初めての試みであったが父兄も加わっての事として格別喜んで貰った。帰る前に雨が降り出し大浜校で雨やどりをして午後二時半帰園

二月十九日 修了記念撮影十時頃から崎山用一郎氏による撮影

二月十九日 種痘接種全児童受く。
二月十日 陳情書提出 教育区材政調整補助金予算に八重山地区各幼稚園にも予算完全に実施されるようにといふ陳情を各幼稚園長並びに職員連合会一同として連署して主席文教局長立法院委員等に提出。

二月廿三日 知念教育課長幼稚園の基格調査の為来園 島袋、与儀両人同伴調査の結果

- 一、当園舎は七十五人が定見である事
- 一、便所が基格に足りない事
- 一、三月中に便所を増設置する事
- 一、其他は合格との事

二月廿三日 PTAの評議員会

宮城園長引退による協議を持つ

一、園長を送る行事を持つ事

一、修了記念事業に付いての話し合
一、基格に合う幼稚園にする方法に関する話し合

一、其他
二月廿六日 便所増設する事に決議。

三月十二日 砂場、水遊び場の修理(五弗也)増設費一〇〇弗也(幼稚園負担)

三月八日 第十四回修了式 九時半開式 来賓石小校長 坂名城長輝

修了児一〇八人、残留児十人の中二年児三人
十時過閉式 午後二時より謝恩会並びに園長を送る会を持つ。

一、PTA会長黒島安典氏の祝辞
一、記念品贈呈
一、園長の挨拶
一、余興各町内代表の踊

一、会は父兄の他男女多数一品携帯で参加、園長との御別れ故に例の無い盛會裡に四時半閉会

三月十日 入園児募集のポスター掲示
三月十一日 入園児受付開始
三月十一日 事務整理
三月十二日 事務引継(備品書類は別冊)

引継者 宮城文
引受者 仲座覇津
右引継済みました

一九六十四年三月十二日

【注釈】

- ・本論文の『沿革誌』は、宮城文の毛筆による直筆の原文を解読し、書写した漢字やかなづかいは概ね原文に従った
- ・「廿」、「世」はそのままだにした
- ・明らかに誤記である語彙は訂正し、曖昧な語彙は、(ママ)を挿入した
- ・解説不明なものは、■で表記した
- ・実名表記が不適切と思われる箇所は、○で表記した
- ・年度名は、判読し易いように、年度ごとに明記し、囲み文字とした
- ・レイアウトは、原文の縦書きを踏襲したが、判読し易いよう体裁を整えた
- ・月日が前後しているものは、原文に従った
- ・修了、終了が混在している箇所は原文の通りとした
- ・宮城の退職日は、原本によると、「一九六四年三月十二日」になっているが、正しくは「一九六三年」である。宮城が他に『沿革誌(控)』を記録しており、その記述で確認した

この項は縦組みです。
85頁からお読み下さい。

志つるえ氏にも同一行動に協力して欲しいと話しかけ三園長は教育長事務所に中央教育委員訪問

一、名実ともに公立幼稚園として認可して貰ふ事

一、認可になるまで職員俸給を補助して貰う事

一、アメリカの百万弗補助金を幼稚園も他の職員並に支給して貰う事 右の通り陳情する

一月六日 譜久盛初枝先生から一三四冊ノート全児童にと寄贈なり。

一月十三日 部落の敬老会でアンプ一式青年団に貸したらボイラーが焼けて故障してアツた。アンプを貸すのは考え問題だと話し合つた。

一月十七日 仲座先生教職員研究大会に出席那覇へ出張に付き出張費補助として十弗支給す

一月廿四日 教育委員会から今年小学校就学通知が届いたが誤りや不正確が多い為返戻す

二月六日 アンプの分解整備料金二弗支払う

二月十二日 学芸会の舞台装置の為父兄午後五時から出勤して貰った。

二月十三日 学芸会午前九時開会。十二時十分閉会 演技中電氣の故障で蓄音機に切りかえ等でてんでこまいで困っていたらようやく電氣がついてどうにか無事に終える。

二月十七日 教育祭 職員は教職員大会の丸映館に出席す。

二月廿二日 遠足崎原公園で遊ばして帰りは八重糖や琉缶の通りを経て帰園バス三台借切父兄のバス賃は父兄持

二月廿三日 旧十六日行事で休園した。

二月二十三日 学芸会の慰労会 黒島食堂会長黒島安典氏副会長新垣隆宏氏兩人招待した

二月廿四日 当園長とみやとり園長は教育長事務所を訪問して職員の増俸に付き陳情す其場でみやとり、みやまえ、やえやま三幼稚園とも公立になっていないと県当局で話していると聞かされ全く驚いて帰園して早速甲文書綴を調べたら三月廿一日付けの公立幼稚園に切り替え一九五四年四月一日から実施の教育長出の文書が見つかった。その文書が当園にしかないという事でそれを教育委員会通して証文として県に提出する運びとなった。名実ともに公立幼稚園になれる日を念じつつ合掌。

二月廿六日 修了記念写真撮影

三月十二日 公民館に宿泊中の琉大生によるペープサートふしぎな童骨なしクラゲの話を園児に聞かせて貰った。

三月廿日 第十三回修了式

修了児一三四人 二ヶ年児男四人女二人一ヶ年児一二人八人残留男一四女一〇

式後父兄による謝恩会あり 会后修了児記念品を贈る為二十仙を各児負担との決議があった 修了児へ御祝の菓子配る。

三月三日 園児募集広告を出す

三月十日 園児入学受付開始(入園申込)

四月六日 第十四回入園式午前十時開始 新入児八八人残留児二四人在籍 一一二人

園長挨拶並に祝辞

P T A 会長祝辞 御祝の菓子配給

引き続きP T A 総会会長黒島安典氏 副会長新垣隆宏氏 我謝正宜氏 評議員二七人選出

四月廿八日 祖国復帰大会に職員出席

五月三日 プランコの工事七寸低くならず。運動場の石割作業

五月五日 子供の日 八重農高校に遠足 帰途観光ホテルを見学して帰園

五月六日 五月の代休に当てる。

五月一〇日 P T A 会 前三十分各組保育状況参観後十五分合同保育参観後懇親会

五月廿三日 飲料水用ドラム缶二個設備但し断水時用として(度々の断水で困り果てた為)

五月廿四日 全児日本脳炎の注射(保健所)

五月卅一日 区委員会教育補助金として受給さる。八十弗拾四仙也

六月十六日 誕生会に譜久村純子の母様からノート四〇冊竹垣純子ちゃんの友たちにと寄贈があった。

六月十五日 幼稚園実態調査書を教育委員会に提出(俸給一人五弗増にして支出して貰い度い)

六月廿二日 園長みやとり園長翁長先生と各教育委員を訪問して職員の俸給を補助して貰うようお願いした

六月廿三日 四、五日来、裏道路拡張工事につき北門交通を禁止した。

六月廿日 石三次郎先生の講演会に全職出席。

七月二日 睦哲也先生のダンス講習に職員三人とも出席

八月 夏休みの当園日左の通り。十日、

十一日、廿二日の三面に予定

九月一日 二期開始

九月五日 暴風の為休園にした。

九月 給食用具ケース求む(十二弗也)

九月廿六日 運動会打合わせの為仲座先生石小へ出向

九月廿日 運動会の助手として仲里喜美子旧給食係りを採用す

十月一日 石小で運動会の予行演習

十月六日 第十四回大運動会(みやまえ、ふたば)

十一月四日 八重山の童歌九種組み合せて振りつけしての行進は大好評であった。みやとり幼稚園は今年から独立の運動会となる。

十一月四日 教育委員会創立十周年記念祝賀会に幼稚園代表としてみやまえ幼稚園の八重山童謡の演技とお猿の野球出演す。これも又大好評を受けた。

十一月七日 第三回全日本美術展出品目録用紙を浦崎経子宛送って貰うようクレパスビル宛文書発送す。

十一月八日 屋良朝苗氏の立法院候補者に協力するようにとのピラ届く。

十一月十日 全日本美術展に図画の出品物を航空で浦崎経子に送る

十一月廿三日 女教師と母の会への予備会を午後八時から持つ盛会であった。クジビキ(アタヤー)を禁止するようにとの要望があった。

十一月廿七日 一九六三年度就学児童名簿作製

十二月十日 百万弗配当金受けるようにとの夢のような吉報が文教局からあって現在俸給の七割四分受く(三月廿一日) 園長、仲座、安里、石嶺

十二月十三日 十割のボーナスを初めて支出

の方法等も見て喜んだ。米を大事にするよう話す

五月廿八日 ハリニュー船で休園

九月廿日 外間永律氏に注文の録音機安里積千代氏届ける

九月廿四日 市放送局員から録音機の使用方法を教えて貰った小さいから大きい型に替えたがよいとの事で仲座榮昌氏交替方を依頼して那覇に送り返す。(二二八二型九〇弗)

九月廿八日 テープレコーダ三二二型代価一〇〇弗受く。スコッチテープ五本他雑費十九弗五〇仙 録音機購入費計一三九弗五〇仙詳細は別記にある

十月三日 運動会の予行演習

十月六日 評議員会運動会の中で

一、綱引に参加鉢巻を忘れずに
二、動作遊戯に参加して貰えるかの件参加見合す事に決る。

十月九日 運動会石小と連合 八時開会 四時閉会。お猿の野球、おとぎ

おんど大好評でした

十月廿一日 琉球政府からスベリ台最後の調査に合格八重山で初の政府補助のスベリ台で堅固で理想に近い物が出来て苦労した甲斐があつてうれしく思う

十一月一日 水道室内に切り替工事着手

十一月三日 文化の日 軍政府に遠足

十一月十六日 室内水道完成

施設総費用四〇弗六五仙(幼稚園支出の部)水道は六ヶ年間屋外にあつて蓋をして錠をおろして外部からの盗水を防いでいたが幾度となく蓋錠こわされたり水を多量に盗まれる等で水道料金も嵩む等苦労が多かつた。長い間の苦労が免れ児童も各室に自由に水を使う事が出来て好都合になる。

十二月廿九日 クリスマスプレゼントの菓子

の配給あり

二月四日 第十二回演芸会

九時半開会十二時閉会 二月一日評議員会を持ち三日午後四時から評議員で舞台作り

二月六日 記念撮影宮良長良氏による
二月十五日 鉛筆削器購入使用
二月十七日 教育祭に職員参加 丸映館に於て

二月廿一日 図画コンクールの賞状届く。大

工ヤスヒロ特選入賞をよろこぶ。入選九人で成績優秀である。

三月三日 修了記念遠足 崎原公園
食後 宮良川、八重糖を見学、帰りは八重

山総合病院見学、父兄喜んで感謝す

三月四日 宮城やよいヒナ一個寄贈(自分の古いヒナ)

三月六日 ヒナダン初飾り、ヒナダンの説明して聞かせ、ヒナ祭りの歌を歌わせてその気分を新たに楽しく遊ばせた。

三月九日 石垣永広氏亡父香典返しとして三弗寄付受く。

三月十七日 市役所から運動場周囲にと植樹寄付あり。

三月十八日 おわかれ会。おわかれの言葉歌等一人々の録音取る。

三月廿日 第十二回修了式
修了児一〇人 三年保育一、二年保育一、一年保育、九八、

残留六

三月廿日 教室窓ガラス十八枚入れる
(度々何者かにやられ遂に十八枚までに上る)

三月廿五日 第十二回修了児父兄寄付として

スベリの下に記念倉庫布設(ママ)

一九六一年度

四月六日 第十三回入園式

一四二人 新入一三六 男六二 女七四 残留児六 男四 女二
例年の父兄会を後日にまわす

四月八日 大浜寛行氏亡隆君の香典返しに
と金参弗也の寄付金受

四月廿六日 流感の為欠員児多くて廿七、廿八日休園

五月十二日 一、PTA総会 九時半開始
二、組別保育二十五分間 合同

五月廿二日 一、予算決算審議
二、会長役員選挙

五月廿二日 一、予算決算審議
二、会長役員選挙

五月廿二日 一、予算決算審議
二、会長役員選挙

五月廿二日 一、予算決算審議
二、会長役員選挙

五月廿二日 一、予算決算審議
二、会長役員選挙

五月廿二日 一、予算決算審議
二、会長役員選挙

五月廿二日 一、予算決算審議
二、会長役員選挙

五月廿二日 一、予算決算審議
二、会長役員選挙

五月廿二日 一、予算決算審議
二、会長役員選挙

五月廿二日 一、予算決算審議
二、会長役員選挙

五月廿二日 一、予算決算審議
二、会長役員選挙

八月廿日 砂場の修理 冬は砂遊び夏は水遊び用に利用する為の修理である

八月廿一日 慶田盛秀子助教諭就任

九月一日 二学期の始業準備のため職員出勤

九月一日 二学期開始
友沢順子、京都待賢幼稚園教諭並に古谷のり子(京都大学生)視察に来園。園児十人を残して童話をして其表現を画かせ友沢先生から感想を職員に話して貰った

九月十一日 暴風の為スベリ台の板とび、ガジマルの木半分程折れる。

九月十四日 暴風警報出る。休園

九月十五日 老人の日今年から休園となる。

十月廿一日 暴風休園

十月廿一日 NHK図画コンクール五人の入賞受く。西里潔、漢那憲吉、本底広彦、南秀通、黒島安隆

十月廿日 戸の修理並にガラス5枚はめる。四教室ともカギつきのまゝ戸を明け放しに庭には瓶の砕けたかけらをたくさん散らしてあったので全く驚き棄権を感じ字会長に監理方に付き青年団の協力を呼びかけて下さるようお願いした。

十月廿五日 秋の遠足 発電所、パイニング場、種蓄場を見学して農校に入り食事をとり休ませて帰る。

十月廿一日 譜久盛初枝助教諭、慶田盛秀子助教諭都合により退職。

十月廿一日 石嶺都代、大浜米子二人の助教諭就任

十一月十四日 当園長はみやとり翁長と名実ともに公立幼稚園としての運営を願ひ出ようという相談をしてそれをやえやま幼稚園長牧

五月十四日 身体検査 (保健所玉城医者により)
 五月十五日 花まつり見学 桃林寺参り
 五月十九日 映画見学・文館
 五月廿一日 回りシーソー設置
 プランコ太鼓橋のペンキ塗
 五月廿二日 P T A総会 三十分保育授業参観 協議 P T A会費十仙に決定
 五月廿八日 ツーハンの結果陽性児七人いるので保健所へレントゲン診察にスエ先生ハイヤーで同伴する。
 六月一日 十周年記念事業に関する集會 決議 マイク購入 記念祝賀会を持つこと 期成会をつくり役員選定する事
 選定された役員
 顧問役 屋嘉部長佐 会長 黒島安典
 会計委員 宮良長成
 委員長 一町内 平良恵清 与儀守啓 二町内 崎山用升 富永長忠 三町内 与那原永有 宜野座正智 四町内 与那原永晃 五町内 我謝正宗 大工善三郎 六町内 古堅宗徳 慶世村清鉄 其他各町内に寄付金徴収人若干
 六月十二日 ○○○タイコ橋より落ち 軽い口部怪我に付石垣病院で治療を受く。
 六月廿七日 チブス予防注射 (全児)
 九月五日 教育委員会から六九弗三七仙補助金受く
 黒島紀子退職 仲里喜美子助手就任
 八月廿八日 スペリ台工事着手
 工事資金 四十弗 市福祉会
 五十弗 子供を守る会
 七十五弗 政府社会局
 九月十二日 スペリ台完成

九月廿九日 放送設備完成 特価二百四十弗取付費、アンブ、マイク、スピーカー、トランス線等取付費 砂場完成 昇降口の上り段下方に一段増設
 十月三日 十周年記念式並に祝賀会
 式順
 一、開式の辞 浦崎経子
 一、事業経過報告 宮良長成
 一、記念品贈呈 P T A会より
 一、放送具一式
 一、謝辞 園長
 一、感謝状並に記念品贈呈 (九ヶ年会長) P T A会長黒島安典
 一、会長挨拶
 一、祝辞 地方長代理富田孫秀氏
 一、修了生代表
 高校 富田忠男 中校 山根小枝 屋嘉部長助
 一、閉式
 一、奉告祭故国吉弘子 (創立当時の職員)
 一、焼香
 一、祭文 職員代表宮良スエ
 一、祝賀会午後二時半開始 園児の演技運動場で 祝餅配給 (園児、当園修了の三年以下の小学生) エン筆配給 (当園修了の小学生四年以上) 祝宴 来賓五十人 酒折詰 父兄一品携帯
 会場
 一、園児並に修了生の成績品展示
 一、装飾 万国旗、モール、紅白、幕、葉玉等で華やかに飾る。
 舞台 長机長椅子で組み立て、ぎを敷
 余興 父兄の舞踊
 閉会 ミルク節 ヤーラーヨーで午

後六時。
 当園創立以来の大事業を新園舎で盛大に挙行する事が出来て創立当時の面目を一新して内外共に一人前の幼稚園として恥ずかしくない程度に漕ぎつくことの出来たのは P T A並に字民各位市当局の御支援による事と深く感謝の念を捧げる。尚修了児にまで祝物を配つたのは貧乏の中で保育された児等に同情による施しであった。顧問屋嘉部長佐氏並に期成会の各位に対しては深く感謝を捧げる。
 寄付金四百八十八弗二十五仙、放送具一式二百四十四弗、記念品六弗、接待費五十人分二十六弗五十仙、祝餅、鉛筆一五弗、雑費七八弗十仙、入金総計四百八十八弗二十五仙 (寄付金総費用三百七十九弗六十仙、残金三十八弗六十五仙、十周年を記念するため創立以来十年の歩みのプリントを作製、尚詳細は別記録にあり
 十月十八日 運動会 石小と連合
 石小は生徒数が多いから別々にするようにとの事でしたが無理に連合にしていたたく。初めて園旗を立て、児童父兄共に喜ぶ園旗に付いて、永年園旗がないので淋しい思をしていたので園長宮城文在職記念として前もって寄付したのである
 一九五九年二月学芸会に初樹立
 十一月廿一日 ■登棒用竿紛失
 一月九日 宮良スエ教諭石小へ転動
 一月十一日 弓削和子助手として任命
 一月廿九日 帯戸並に床修理
 二月七日 第十一回演芸会
 午前十一時頃アンブの故障と大騒ぎしていたら電気故障であった為演技も上手に盛会裡に終る
 三月十五日 第十一回修了式

修了児二六人 二ヶ年児一五人 男八女七
 一年保育一〇八人 男五九 女四五 残留児一二
 式後浦崎経助教諭退職に付き P T A会員と共に送別会を持つ。P T Aから赤縞のグンボー、幼稚園から金五〇弗を記念品として贈呈して六ヶ年間の薄給で献身的努力に対し感謝の意を表す
 一九六〇年度
 四月一日 安里タマ助教諭就任
 四月四日 第十二回入園式
 一〇八人 新入九六 残留一二
 午前十時より入園式引続き父兄会を持ち会長黒島安典氏 副会長与那原永有氏 漢那憲明氏並に評議員選出して十二時過閉会
 四月九日 新川農研クラブ砂馬車十台寄付受く
 四月十八日 児童検診方依頼の為みやとり園長翁長先生と当園長と保健所に交渉したが断わられた。
 四月廿八日 沖繩土地整理株式会社員調査に来園
 四月廿日 父兄会 午前十時開会
 一、朝礼 一、保育参観 一、合同保育
 エプロン着物Mの大きいマークをつけてあっさりして可愛いくよい感じであると喜ぶ。
 五月三日 花まつり 桃林寺参観
 五月五日 子供の日運動場に鯉幟を立て祝う。農校に遠足 広場で五月生れの誕生会を試みたところ盛会で適当なよい方法だと思つた
 五月十四日 稲刈見学十時から平田原で脱穀

- 一、借家したら散らばって統制が困難である上に家賃の負担に苦しむ事になる。それより父兄主体となつて地均しする事
- 一、便所設置は父兄で担う事
- (イ)父兄一人参拾円以上寄付する
- (ロ)建築は平良恵清氏努力奉仕。
- (ハ)セメント一袋眞玉橋長完氏寄付
- (ニ)砂運搬は馬車を持つ父兄負担
- (ホ)不参加の折は五十円寄付する
- (ヘ)作業は四月十六日午前八時半開始
- 四月十六日 父兄の奉仕作業午前八時から午後五時まで
- 一、便所穴掘岩盤で難工事で今後は専門家にさせる方が良いとの事でした。
- 一、水道移転も難工事ながら無事にすむ。
- 一、地均しも三分の二程の整地出来た。
- 四月廿三日 礼状發送(作業時の)
- 四月廿七日 修業生の地均し作業 日曜を利用したら百人余参加して午前中で解散
- 五月一日 スベリ台も見事に完成したので鯉幟を立て新園舎を飾った。園児等はとても喜んでくれたが移転出来ないのが残念でならない
- 五月三日 新旧園舎の土神祭宇副会長稲福氏夫人と二人で当る。
- 新園舎へ仮移転。館内外とも未完成であるが父兄の希望もあつて字有志の許しも受けて仮の移転をなし、五月五日子供の日は幟の下で■を祝い六日の日は旧園舎へ戻る。
- 五月四日 婦人会の地均し奉仕作業。百六十人の夫人出動で地均し作業をしてすばらしい活動ぶり地均しの方は一段落付く。
- 五月六日 突出している石割(専門家に有料で)
- 五月廿六日 花祭 桃林寺花祭見学
- 五月廿八日 帯戸出来上がり(幼稚園負担)
- 七千式百円也の大金で帯戸を立てた理由は青年団専用を区画して置いて幼稚園を守る為である。
- 五月廿一日 公民館検査合格
- 幼稚園が地均し水道便所を整備したからこそ公民館としての資格を得ることが出来たのであつて他の公民館とは異なる点である。
- 六月二日 正式に移転
- 名実ともに公民館の新園舎に移る。幼稚園として八重山初の現代的コンクリト園舎でうれしい中にも移動する材(マ)産何一つとしてないのは恥ずかしく心苦しい事である。我家造りにさえ苦労した事のない女園長としての公民館造りには心身ともに疲れ果てて感無量涙の喜びで夢心地という心境である。
- 六月二日 寄贈の数々(落成記念として)
- 一、柱時計 宮良医院(園長友人)
- 一、太鼓、鈴 外間永律(ハ甥)
- 一、紅白幕 仲座英昌 ■津津先生主人
- 一、オルガン 浦崎永八郎、宮城信男、信治、国吉長庸、大浜用一、大浜用光
- 六月十八日 市役所へ当園沿革誌大要記提出
- 七月七日 七夕まつり
- 一、七夕飾り共同作
- 一、おべんとう会 誕生会
- 前の隣家に火事なり。無事
- 七月十五日 暴風の為休園
- 七月廿日 一学期修了式
- 夏休み
- 職員製作の夏休みのパンフレット配る。
- 招集日八月一日、二日、一日、十八日、誕生会 お弁当会
- 九月九日 教育長事務よりミルク七箱と八個受く。教育委員会から九、八四三円の補助受く。
- 金城珍吉氏から綱引綱の寄付あり。
- 十月九日 運動会予行演習をなす。
- 十月十三日 運動会天気に恵まれ演技も上出来で無事終了
- 十月十九日 文館主催の図工作展示会見学の批評に来園
- 十一月三日 特賞浮く。名嘉地用昭氏図画の批評に来園
- 十一月十八日 園内お話しコンクール、各組三人ずつ弁士を出し優秀児を賞す。
- 十一月廿三日 日本全国美術展に図画十五点出品
- 十一月廿九日 九、十、十一、十二月生の誕生会
- 十二月四日 便所 水飲の間を仕切るようにとの保健所の注意を受けて仕切る。
- 二月十三日 P T A評議員会十周年記念事業に付いての話し合
- 二月十四日 業に付いての話し合
- 二月十四日 一、マイク購入する事
- 一、新入生父兄卒業生父兄にも協力を御願ひする事
- 一、舞台は三日前に夜業で作る事
- 二月廿六日 午後八時から父兄会場準備に出勤機、腰かけを利用して段を作り畳だけ石中から拝借
- 二月廿八日 第十回学芸会
- 新園舎での初の演芸会故一同格別の張り切り振であつた。午前中盛会で終了。会后御祝の菓子配給。後片付をして父兄と懇談
- 二月四日 修了記念写真撮影
- 三月六日 遠足崎原公園
- 三月六日 みやどり幼稚園長翁長先生と新年度の打合せ(左の事項につき)
- 一、明七日午後から新入児受付
- 一、ラジオで受付け日を放送する事
- 一、保育料八十銭に上げる事
- 一、学習用品代保育料と計一弗五五仙を前納する事
- 三月七日 新入児受け付午後から開始
- 三月九日 水飲場の前のブロック垣完了
- 三月十二日 第十回修了式
- 修了児一四四人。一ヶ年児一三、二ヶ年児一三 教育長代理として伊良皆高成氏参列
- 一九五九年度
- 四月四日 第十一回入園式
- 新入一〇一人 残留一七人 計一八人
- 受付十時開始式後 P T A 会長推進
- 会長黒島安典氏 副会長 与那原永晃氏
- 金城珍吉氏
- 五月一日 北側の戸袋増設
- 五月二日 押入棚及び戸のカギ取付
- 五月五日 子供の日 農校へ遠足
- 五月九日 母の日
- 五月十一日 婦連より菓子配給を受く
- ツベルクリン注射(八重山保健所)

六月二三日 カトリック教会よりミルクの配給受く。三五个運賃一五七円五〇銭払う。

十月十二日 六千式拾七円也教育委員会補助受く。

十月廿一日 運動会石垣校と聯合
十一月十日 文館主催の童話会に参加
弁士宮城信義 伊良皆加代子 二人とも最優秀と好評受く。

十一月廿九日 園舎、床壁修理
十二月十一日 文館で映画の鑑賞
十二月廿九日 比嘉行政主席の政府葬に付休園

一月十九日 丸映館で亡びゆく大草原見学
二月十日 演芸会 石中で九時半開始
二月十四日 父兄早朝から会場準備に出動
二月十四日 ミルク百五個カトリック教会から受く。

三月二日 修了記念写真撮影

三月四日 遠足崎原公園への予定でしたが悪天候のためバスに乗った。そのまま丸映館に向け映画見学と誕生会に変更した。父兄も共に喜んで貰った。

三月十二日 腰かけ椅子の修理
三月十四日 第八回修了式

修了児 一五五人 男七九
女七六 二ヶ年児二〇人
男一〇女一〇 残留二〇人
三月十五日 不当の金支出 その経緯

現幼稚園敷地は前述の通り崎山氏から浦崎永八郎が宮城信勇と二人で保証人になって地料月百七十円也で借り受けたもので公立幼稚園と認定された頃から何れは運動場も入らなくなるんだから自分等二人で買うようにと己に話しかけてあるのです。宇新川では公民

館を建設してさし当り幼稚園に貸す事にするから幼稚園もPTAも字民と団結して建設する事に決議しました。先ず敷地を探す事からと東奔西走四苦八苦で探し回るけれど適当な敷地を得る事が出来ないからととうと狭くても運動場として使用している現敷地を譲ってもらうようにとの事でしたので浦崎も信勇も字のため母のためにと快く字に譲る事にした次第である。字は早速琉銀から借金して買受けたのであるが字有地になっているその借金の利息式千円也をPTA会長神村氏は幼稚園に支払うよう命令されたのである。

一九五七年度

四月六日 第九回入園式

入園児 一四七人 新入児 一一八人 男七二 女五六
残留児 一九人 男一〇 女九
保育料八〇円入園料一〇円に値上げる事に教育委員会認可
今年度より新布令施行

一、一教室四十人まで四十人以上の時は本務教員の他に助手一人おく事。
一、一教室二十五人の時は本務教員一人とす

四月廿九日 新布令により教員四人増員
本務教員喜納照江 助手弓削和子、黒島紀子、入富西愛子
五月廿二日 父兄会九時から
一、三十分保育参観
一、十分園長合同保育
一、十時からPTA会
一、評議員及び会長選

館を建設してさし当り幼稚園に貸す事にするから幼稚園もPTAも字民と団結して建設する事に決議しました。先ず敷地を探す事からと東奔西走四苦八苦で探し回るけれど適当な敷地を得る事が出来ないからととうと狭くても運動場として使用している現敷地を譲ってもらうようにとの事でしたので浦崎も信勇も字のため母のためにと快く字に譲る事にした次第である。字は早速琉銀から借金して買受けたのであるが字有地になっているその借金の利息式千円也をPTA会長神村氏は幼稚園に支払うよう命令されたのである。

一、設備費に付いて
一、PTA会費に付いて決議
会長黒島安典氏 副会長宮良安宗氏 評議員与那原永有他三十人、父兄十円ずつ出して設備費に当る事、一学期十円出す事にしてPTA会費、紙代はださないこと。
六月一日 ハリニュー船で休業
六月廿一日 暴風で休園
屋根瓦敷や竹が腐って屋根を支えている木も腐ってとても危げん状態になり不安でたまらない心境である
六月廿八日 屋根修理材料は宮城から出し修理は平良恵清氏努力奉仕による。
六月廿八日 水道のコック修理
七月六日 七夕飾り共用製作後でお弁当会をして菓子配る。
七月廿八日 PTA評議員会
公民館を速急に建設すべきだという話し合いで一決し、その促進運動に強く当る方法に努力する事になった
九月十三日 六千二百円也教育委員会補助金受く
十月二日 マラリヤの採血検査を受く(保健所)
十月廿日 運動会 石小と聯合
十月廿五日 PTA評議員会
運動会の慰労を兼ねて公民館を四十坪とせざ四十八坪に建てるよう運動する事にして父兄に字総会には是非出席するよう通知する事決議
十月廿一日 公民館建に付いての字総会に出席下さるようにと父兄に文書発送。
十一月五日 公民館建設の件の字総会に出席職員父兄多数出席して公民館四十坪建設の字

予定案に異議を申し出八坪増四十八坪建てにと訴えろと喧々嗷々貧乏所帯故にそれで我慢しろとの事でした。
園長説明 現布令一教室四〇人以下とされていきます。当園児数は百五、六十人が三ヶ年続いていまに四十坪では字、幼稚園の押入等の他は三教室にも足りないから他に一教室建てるか借家かしなければいけない事になります、それにコンクリート造りは出来上った家に増築する事は難事である最小限度に使用出来るよう頑張っていただき度いと嘆願の末よく(ママ) 四十八坪建と決定。
十二月廿七日 公民館地鎮祭並びに旧園舎感謝祭を神司黒島信氏と稲福婦人を頼んで三人で営む。
二月十六日 遠足 崎原公園
三月二日 演芸会 石中拝借父兄早朝から準備のため出勤九時開会 十二時閉会
三月十二日 第九回修了式
修了児 一四七人
二年児 一九 男一〇 女九
一年児 一一八 男七二 女九
一九五八年児の父兄には格別に公民館建設に付いてお世話になりながら新園舎使用せず修了した事が心残りであった

一九五八年度

四月四日 第十回入園式九時半から受付
新入児 一三一人 残留一三人 計一四四人
新園舎間に合わず旧園舎で行ふ。
式後役員選挙
決議一、休園されては困る

予定案に異議を申し出八坪増四十八坪建てにと訴えろと喧々嗷々貧乏所帯故にそれで我慢しろとの事でした。
園長説明 現布令一教室四〇人以下とされていきます。当園児数は百五、六十人が三ヶ年続いていまに四十坪では字、幼稚園の押入等の他は三教室にも足りないから他に一教室建てるか借家かしなければいけない事になります、それにコンクリート造りは出来上った家に増築する事は難事である最小限度に使用出来るよう頑張っていただき度いと嘆願の末よく(ママ) 四十八坪建と決定。
十二月廿七日 公民館地鎮祭並びに旧園舎感謝祭を神司黒島信氏と稲福婦人を頼んで三人で営む。
二月十六日 遠足 崎原公園
三月二日 演芸会 石中拝借父兄早朝から準備のため出勤九時開会 十二時閉会
三月十二日 第九回修了式
修了児 一四七人
二年児 一九 男一〇 女九
一年児 一一八 男七二 女九
一九五八年児の父兄には格別に公民館建設に付いてお世話になりながら新園舎使用せず修了した事が心残りであった

でしたが当夜一時には産のため急死となる。創立当時から薄給に甘んじ研究に努め献身的に奉仕して貰った功績は未久くたゞえたいものと思う

三月十四日 第六回修了式 十二日予定でしたが国吉教諭逝去のため二日延期

修了児 一四五人 男八三女六二
二ヶ年児 一二人 男五女七
残留児 二二人 男一五女七

一九五五年度

四月五日 番小屋の後始末 園舎前に二間（四坪）のカヤブキの番小屋があつて青森県人が住んでいたが国へ引きあげたので空家の古屋そのまゝであつたのでとり崩して百円也で売つてその金を會計にくり入れた。

四月六日 マイチバー嶽の庭を遊び場にするのを禁止される。字有志の協議により認可申請にも運動場マイチバ嶽境内一〇〇坪として許可されたので当然使用権あるものとして遊ばしているのに神詞故にだしぬけに禁止を命ぜられて全く当惑、何という情けない事だらう。残念でならない。ウブや拜殿には絶対入れないようにして神崇拜の精神教育にも努力しているのに字の将来を担う宝子等しかも四、五坪の余地さえない整列にさえ困つて

いる貧乏幼稚園に神さまは恵みの手を伸ばせて守つては下さらぬのかと固唾を呑んで泣寝入りする他なかった。其後は仕方なく嶽の西側神村家との間の道に職員全部つきつきり遊ばせる事にした。眼前に空いている嶽の境内や木陰をうらめしうに眺めながら園長先生あそいで遊ばしてという児の言に涙ぐむ事も何度かあつてとうとう運動場を借りる事に決

心したのである。
四月六日 マイチバー嶽へ詫の行事
水道を神の通路に設置してすまなかつたというお詫びをすべきだという事でPTA会長黒島安典氏と園長其行事に当つた。

但し普通の神供物で。
四月六日 第七回入園式

新入児 一三八人男七〇女六八
残留児 二八 男一六女一二
在籍 一六六人
式後PTA会

一、正副会長推選
会長黒島安典副会長宮良マサミ

一、協議 運動場の件決議 借地する事（皆で探すこと）
一、園舎外の整理

決議 来る廿九日父兄総動員で整地すること

四月七日 大浜米、新垣初二人の助教諭就任
四月九日 宮良艶子助教諭石垣校へ転任
五月二日 新垣初助教諭退職
五月二日 父兄総動員奉仕作業（五月廿九日予定が延期になる）

一、水道移転及び便所修理
一、舎外地均し砂運び

五月二日 運動場敷地貸借の件成立
字石垣崎山用番氏所有の作地三百二十坪

地料一七〇円也で借地。浦崎永八郎、宮城信男二人で探し求め二人で責任を持つことにして辛じて借地契約が成立する事ができた。

五月二日 作物の損害賠償金八百円也支払つてPTA総出動で作物を除き地均して砂を敷きつめ立派な運動場となる。
五月三日 水道使用開始 それに関する札

状発送 水道設置になるまで
（詳細は別書綴にあり）

第六回入修了児記念事業として水道設置するようになり会長黒島安典氏他評議員宮良喜久大浜史が主体となり東奔西走前後五回の評議員会を持つ等手水鉢付設置となる。（参千五百円集金）
五月三日 水道設置の札状発送
六月四日 大浜米助教諭退職
六月廿六日 初の保育研究会（海星）に参加。
六月廿日 鉄装のブランコ設置、新運動場に大田長成氏資材寄付による。

七月七日 七夕まつり 七夕まつりの飾り
八月一日 バザー開催PTA主催豊年祭バザー場所大浜五郎氏宅中座家園内

水カキ機九台水水冷しコーラー等純益五千参百参拾六円也内金で蓄音機購入。各部とも活発な動きで感謝一杯という心境であつた。

九月三日 崎山京子助教諭退職
九月十日 宮良艶子助教諭就任
九月十日 PTA臨時会、崎山助教諭に記念贈呈に関する協議

決議、父兄一人五十銭ずつ出金して記念品贈呈する事記念品は園長に一任する事。記念品は九〇〇円の鏡台中六〇〇円父兄負担三百円也は幼稚の補助。PTA会長と職員二人で崎山家に持参贈呈する。ところが受け取れないので困つたが後で始末することにした。

十一月七日 児童の身体検査、保健所で野田女医による。
十一月十五日 文館で童話コンクール 屋嘉部なが子入賞
十一月十九日 園舎床壁等修理資材宮城負担

一月六日 金参千円也補助金受け職員賞与に当つ
十二月廿二日 金五千円也那覇福祉協会からスベリ台布設補助費として受く。

石垣市で東奔西走して寄付金の工面をしたが得られず友人古堅ゆき氏を通して四苦八苦で得た金である。おかげでコンクリートに板をつけた堅固な立派な八重山一を誇るスベリ台に完成することが出来た次第である。
二月十九日 演芸会 石中南校舎拝借
未明から父兄会場の準備出動。
帯戸の開閉に苦勞した。

二月十九日 金六百円也會計に入る 京子先生記念品を安売りにして得た物で父兄の許可を受けての上である。
二月十九日 前幕を求む、凶案宮良長良氏
三月十四日 第七回修了式 九時半開会
修了児 一六七人 二ヶ年児 二九人 男一六 女一三 一ヶ年児 一三八 男十六 女一三
皆出席一六人式後父兄の感謝会を受く

一九五六年度

四月七日 第八回入園式

新入児 一三八人残留児 二二人 計一五九人
式後PTA役員選挙 会長神村高佑氏 副会長吉野高成氏 宮良マサミ氏
遠足 農林高校
五月九日
六月十五日 黒板三枚新調二千円也
六月十七日 水道蓋押入作製

- 一、佐久真長助氏の祝辞
一、感謝状贈呈
後藤西秀雄氏 高那太郎氏 当真太郎氏 池村英能氏 大底満名氏
一、十二時閉会
一、引続き祝賀会 宇有志多数出席
祝賀会では演劇がすばらしく上達したとの賛辞を受け殊にチンネンサン、桃の花、舌切雀があまりにすばらしかったとの事でした。
一、その場で幼稚園の敷地園舎新築など急ぐべきだという問題が出て直に期成会を持つようにと二十人の假委員をあげ幼稚園教育に対する熱弁などで花を咲かせた
二月廿四日 終了記念撮影
各児演芸会の服装で
二月廿七日 終了記念遠足 大浜公園
一月十六日 公立幼稚園になるまで
三月三日 去年初め頃から公立幼稚園申請方についての話し合いはみやり、みやまえ間では教団にわたり問題になっていたがやえやま幼稚園は同調して貰えずみやもとり翁長園長、みやまえ園長両園PTA会長主催で九時までで当事務所へ送って下さるよう通知いたします。
- 一九五四年度**
四月一日 公立幼稚園認可一九五四年四月一日付
四月一日 職員履歴書提出
四月八日 第六回入園式
一、九時半から受付
一、新入児 一三四人 残留児 二三人 計一五七人
一、入園料 一〇円
- 四月廿四日 一、保育料四〇円(三〇円から十円値上)
新入児の歓迎会
残留児でプログラムを組み菓子配り残留児の余興で賑やかに祝った。
五月一日 今日から鯉幟を立て始めた。
五月五日 子供の日 農林高校に遠足
五月十日 全校図画展示会見学
花まつり
一、花まつりに付いての話
一、桃林寺の花まつり見学
五月十一日 金百円の寄付を受く
その父兄から贈らる。
〇〇〇君急死 児童から一銭の香典 職員各思い思いの香典を出して葬式に参加。
五月廿日 父兄会 九時半開始
一、十五分間各組の授業参観
一、十五分間合同授業参観
一、会長選出及び懇談
五月廿一日 黒島貞子先生石中へ転勤
五月廿四日 宮良艶子教諭就任(一五〇〇円)
六月四日 ハリウセンに付休園
六月七日 海人草服葉全児童
七月七日 七夕まつり
一、七夕飾 共同製作
一、菓子を配給
一、七夕まつりの話
一、七夕まつりの歌合唱
一、弁当会
八月休中 登園日 五日、六日、七日、
- 八月廿日 二〇日
八重山保育会誕生
松村康平先生を囲み富村教倫氏が産婆役となる。
会長大浜孫伴氏
副会長石垣ハツエ氏
九月十五日 職員用椅子三脚新調
十月十三日 運動会天気に恵まれ盛会であった。遊園地ゆきは格別の好評を受けた
十月廿三日 チフテリア注射を全児童受く。
十一月十三日 文化ママ主催の童話会に参加
加 虹 宮城信紀
私の人形 吉野かよ子
兩人とも一等賞になる
十一月十五日 一年生用教科書中の金として四千拾八円を文教図書に納入
十二月廿一日 字の補助金参千円也を真謝部落会長から受く。
一月廿五日 早稲田大学総長大浜信泉氏出迎
粗末な園旗を手製連製して立て
教育長事務所前で整列して出迎た。
二月一日 終了児の記念事業に付いて打合せを宮良喜久氏方で持つ 水道布設(ママ)の方法を吟味した
カトリック教会からチョコレートのプレゼントを受け全児に配給。
二月八日
二月十三日 演芸会
一、会場石中南校舎
一、父兄早朝から会場整備をなす
一、閉会後父兄との懇談会を持つ。
- 三月二日 園児募集ポスター、シンバル、タンブリン等の注文書入手。シンバル入嵩西太郎氏故御尊父様香典返しにの寄付参百円也で求むペスタロッツチ祭児童休園
二月十七日 職員は文館で教職員会に出席後万世館で二十四の瞳見物
二月廿三日 大浜孫伴みやもとり幼稚園長逝去に付き全児より一円ずつの香典を募り代表十人の園児と全職員葬式に参列
二月廿六日 新就学の児童予備教育の為石垣校に職員同伴
三月四日 遠足 終了記念遠足大浜公園雨のため校舎(大浜校)で食事をして午後三時バスで帰園
三月七日 水道設置の工事着手
場所 園舎西石垣野座との間の石垣をくずしそこに石垣と同列にしての設置
三月九日 水道工事完成 水道は完成したが嘉数カマンガーから神の通り道になっているからとても悪いとお叱りを受けてがっかりした。園長としては狭い敷地で出来るだけ場所をとらないようにとの考えであり、なお豊年祭の暑き最中の行事などには道にも水を撒いたり綱引の人々にも水を利用して貰ふなど年一回の社会奉仕もという気持ちで道近くにとその場所をPTA会長職員と相談の上宜野座家の承諾も受けてのことでしたが国吉教諭急死にも神罰云々されたのでどうとう場所をかえて南端に移す事になった
三月一日 国吉弘教諭急死
当日は十二月予定の終了式の案内状を整える等して午後五時過まで執務に一生けんめい

遊戯出演
一、大田洋子他七人の女兒 あの子はだーれ
一、宮城信博他七人 おとうさんのひるね かーねーしょん

式後中野ふじ氏発起により職員
の慰労会並に其場で終了記念に
職員の手紙を贈るの決議があ
った。

ガリバン贈写版ないので午後一時から市農
連で夜一時までかかって出来上がる。農連職
員にも手伝って貰うなどで御迷惑かけてすま
なく思う

補助受く
第五回運動会
十月五日
昨十四日の予定が雨天のため本日に変更。
天気は恵まれ盛会であった。当園の紅白のザ
イのキヤリは格別に好評を曲の愛マコ曲歌詞
作りは外間永律氏

五月廿七日 爬龍船 休業
六月十八日 西昇降口の下駄箱の質の子設備
七月八日 石垣市教育委員に補助金申請
十一月二日 運動会石小と聯合 出演四回
十一月廿八日 休園 ハシカ流行のため今日
から一週間休業とする

四月九日 第五回入園式
一七人新入 三四人残留児
一五一人計
四月九日 式後父母協議会
一、役員選挙 会長黒島安典氏
職員用椅子並にテーブルの寄付
を受ける（第四回終了児父兄方
から修了記念として
黒島貞子教諭就任（職員増員）
子供の日 農林高校見學
五月五日 身体検査
五月八日 保健所で検査を受けたが驚いて逃げた子、
泣く子、うんこたれる子などいて大へんだし
た。保健所での検査は今後すべきではないと
思った。

七月廿二日 豊年まつりのバザー
朝未明から父兄出勤して会場準
備して正午からバザー開始
一、カキ氷 二人
一、氷水 四人
一、キャンデー 八人
一、アイスボンボン 八人
一、運搬係 一〇人
一、宣伝係 五人

何れも最優秀の好評を受く
十二月廿八日 参千円也 字会の補助受く。
十二月廿八日 小黒板二枚 下駄箱に備付け。
一九五四年元旦
新年式
一、九時半開始
一、年詞を交はず
一、日の丸、風の歌合唱
一、アメ玉配給

十二月廿三日 イートン氏よりチューイングガ
ムのプレゼントがあった。記念運動場に集合
させて飛行機よりサンタクロースが下りてき
てそれらの幼稚園にチューイングガムを手渡し
する風景はさながら天使のようでした。信じ
切っているようです。すばらしく興味深く感じ
ました。園児等は本物のサンタクロースと信じ
十二月廿八日 金参千円也字会の寄付受く。
一月廿四日 金壹千貳百円也市役所の補助
受く。

四月十四日 黒島貞子教諭就任（職員増員）
五月五日 子供の日 農林高校見學
五月八日 身体検査
五月八日 保健所で検査を受けたが驚いて逃げた子、
泣く子、うんこたれる子などいて大へんだし
た。保健所での検査は今後すべきではないと
思った。

各組とも活発に動いて殊に与那原永晃氏の
メガホン宣伝はすばらしい人気でした。売行
の割に利益が少ないのに対し不満の声がした
のは惜しかったが父兄の熱は涙ぐましい■で
感謝で一杯でした。金八百四十三円也利潤と
して会長より受けそれに七百円也を幼稚園か
ら足して早速ガリバンと贈写版を発注した
七月

公立幼稚園申請中に付き教育長
事務所でPTA会長も同席で打
合せ会を持つ
決議事項
一、案内状廣く書く有志に出す事
一、当園に格別協力した方には感謝
状を出す事
一、会場には石中を拝借する事
一、会場は父兄で作る事
一、会場各自一品で携持して祝う事
二月廿一日 五周年記念大演芸会
一、会場石中中学校舎
一、主なる来賓
宮良永益氏 玻座真里芳氏
佐久真長助氏 各幼稚園園長

二月十六日 休園 音楽講習会のため
二月十七日 ペスタロッツ祭に付き休園
三月四日 演芸会舞台裏取り付のため父
兄多数参加してドラム缶板等
で立派に作って貰った
三月五日 演芸会
狭い園舎ながら北側戸外から
舎間に舞台を作ったため割に
上出来で名案だったとうれし
く思った

五月廿九日 父兄会
一、保育参観
一、協議
決議
一、豊作豊年祭りの日にバザーを
持ち幼稚園資金に当てる事
一、唐真太郎氏ブランコを寄贈す
る事

机、オルガンの備付は夢となる。第四回入
園式当日機備付の件で決議した一人の父兄二
十七円ずつ負担して云々であったが今になる
まで寄付金は全納は四人半納四人その他は未
納で機備付は不可能になり父兄の理解を得て
それをオルガン代の足しにまわし参千貳百円
也にしてそれを鈴木長次郎氏に購入費に委託
したがそのままになりオルガン備付も夢とな
ってしまった。在籍も増えて狭い園舎に机を
並べるゆとりもないので当分機備付などは考
えない事にした。そこで前父兄に回章（ママ）
で机代として半分が集った金はオルガン代に
足す事を賛同して貰うようにしたのである。
八月廿一日 参千五百六拾九円也教育委員会

公立幼稚園申請中に付き教育長
事務所でPTA会長も同席で打
合せ会を持つ
決議事項
一、案内状廣く書く有志に出す事
一、当園に格別協力した方には感謝
状を出す事
一、会場には石中を拝借する事
一、会場は父兄で作る事
一、会場各自一品で携持して祝う事
二月廿一日 五周年記念大演芸会
一、会場石中中学校舎
一、主なる来賓
宮良永益氏 玻座真里芳氏
佐久真長助氏 各幼稚園園長

三月廿日 第四回終了式
終了児 一〇七人
一ヶ年児 六四人 二ヶ年児
八人男七女一 残留児 三五人

七月七日 七々まつり
一、七々まつりの飾り共作（各担）
一、菓子を配り七々まつりの歌など
合唱させて祝った
七月十五日 夏休みの友作製

公立幼稚園申請中に付き教育長
事務所でPTA会長も同席で打
合せ会を持つ
決議事項
一、案内状廣く書く有志に出す事
一、当園に格別協力した方には感謝
状を出す事
一、会場には石中を拝借する事
一、会場は父兄で作る事
一、会場各自一品で携持して祝う事
二月廿一日 五周年記念大演芸会
一、会場石中中学校舎
一、主なる来賓
宮良永益氏 玻座真里芳氏
佐久真長助氏 各幼稚園園長

公立幼稚園申請中に付き教育長
事務所でPTA会長も同席で打
合せ会を持つ
決議事項
一、案内状廣く書く有志に出す事
一、当園に格別協力した方には感謝
状を出す事
一、会場には石中を拝借する事
一、会場は父兄で作る事
一、会場各自一品で携持して祝う事
二月廿一日 五周年記念大演芸会
一、会場石中中学校舎
一、主なる来賓
宮良永益氏 玻座真里芳氏
佐久真長助氏 各幼稚園園長

三月廿日 第四回終了式
終了児 一〇七人
一ヶ年児 六四人 二ヶ年児
八人男七女一 残留児 三五人

七月七日 七々まつり
一、七々まつりの飾り共作（各担）
一、菓子を配り七々まつりの歌など
合唱させて祝った
七月十五日 夏休みの友作製

公立幼稚園申請中に付き教育長
事務所でPTA会長も同席で打
合せ会を持つ
決議事項
一、案内状廣く書く有志に出す事
一、当園に格別協力した方には感謝
状を出す事
一、会場には石中を拝借する事
一、会場は父兄で作る事
一、会場各自一品で携持して祝う事
二月廿一日 五周年記念大演芸会
一、会場石中中学校舎
一、主なる来賓
宮良永益氏 玻座真里芳氏
佐久真長助氏 各幼稚園園長

公立幼稚園申請中に付き教育長
事務所でPTA会長も同席で打
合せ会を持つ
決議事項
一、案内状廣く書く有志に出す事
一、当園に格別協力した方には感謝
状を出す事
一、会場には石中を拝借する事
一、会場は父兄で作る事
一、会場各自一品で携持して祝う事
二月廿一日 五周年記念大演芸会
一、会場石中中学校舎
一、主なる来賓
宮良永益氏 玻座真里芳氏
佐久真長助氏 各幼稚園園長

冊 ライフ ダイゼスト 情報教育として毎月一冊の配給があった

八月中

園歌及びオイモチャン歌製作
作詞 宮城信男氏
作曲 外間永律氏

一九五〇年度

四月八日 第二回園式
園児数 六六八
男二九人 女二八八
残留児男七人 女二

九月四日
十月二日

園歌及びオイモチャン歌製作
振付 宮城弘(国吉)
労働祭 休園
石小で運動会の打合せ

四月十三日
文教部より有料給配
インク二個 四十二円
用紙一〇〇枚 三十円

十月十三日

一、期日 十月十三日
一、出演数 幼稚園三面
一、父兄席は各幼稚園で作る事
一、音楽隊の接待は幼稚園も協力する事

五月五日
子どもの日
一、鯉幟掲揚
一、カシワ餅配給して祝う(カシワ餅は園長宅からプレゼント)

十月十四日

一、案内状は別々に出す事
一、受付は各々で出す事
一、マイク使用料 楽隊接待費は負担する事

五月九日
父兄会
一、保育状況参観
一、協議
一、役員選挙

十月十三日

一、礼状案内状も負担する事
第二回運動会(園歌及びおいもちゃん初演技)雨天の中で午前の部決行 当園の演技中最もひどかった。

六月廿四日
文教部より配給
ライフ ダイゼスト
米国独立記念日 休園
七夕まつり
七夕飾り共同作
菓子配給
七夕の歌等合唱
一学期終了式
八月登園日七、一〇、一四、一五、二一各月

十月十四日

運動会午後の部午後一時から
安里知事就任式 休園
軍政府から消毒石けん六六個
児童へ配給受く
暴風のため園舎の屋根壁壁便所等大破損

七月四日
米国独立記念日 休園
七夕まつり
七夕飾り共同作
菓子配給
七夕の歌等合唱
一学期終了式
八月登園日七、一〇、一四、一五、二一各月

十一月十日

暴風のため園舎の屋根壁壁便所等大破損

七月四日
米国独立記念日 休園
七夕まつり
七夕飾り共同作
菓子配給
七夕の歌等合唱
一学期終了式
八月登園日七、一〇、一四、一五、二一各月

十一月廿七日

評議員会
佐久真スエ教諭退職
佐久真教諭に対する御礼に付き決議 父兄一人十銭出金して記念品代として贈る事

七月廿四日
一学期終了式
八月登園日七、一〇、一四、一五、二一各月

十二月廿三日

二学期終了式
崎山孝子助教諭就任
第二回学芸会

八月登園日七、一〇、一四、一五、二一各月

一月廿一日

第二回学芸会

マイチバー嶽を控室にして園舎で演じたが崎山助教諭忌引のため大へん苦勞した
二月廿八日 補助金参千円受く(宇補助の始まり)

石垣校と聯合
一月廿四日 一〇〇〇円也 石垣市役所補助受く
二月廿日 二〇五〇円也 新川辰年生まれの方々から代表石川正松から寄付金として受く

三月廿日 第二回終了式
終了児六十六人
二ヶ年児 男七 女二
一ヶ年児 五三
残留 男二 女二

二月十四日 第三回演芸会
少人数で各児満足に演じさせた。
第三回修了式
四月十三日 三一人男一二人 女 三人残留児二人 男一人一人女

四月九日 第三回入園式
午前九時より受付
新入児四五人
残留児四人 計四九人
戦争児で少数児での入園式故に父兄初め感無量という淋しい入園式であった
子供の日
鯉幟を立て園長家からのカシワ餅を配給し鯉幟の歌等合唱して祝う。

四月十日 第四回入園式
一〇九人入園児 八人残留児 一七人計
式後協議会
一、役員選挙
会長 黒島安典氏
一、椅子新調に付いて
父兄一人二七円負担する事
カーテン二枚求めて二教室に仕切って授業開始
花まつり
一、桃林寺の花まつり見学
一、甘茶を全児童に飲ます
子供の日
鯉幟掲揚
遠足 農林高校
母の日
一、石垣市婦人会主催の母の日に

一九五一年度

一九五二年度

宮城文の直筆（毛筆）による記録
『みやまえ幼稚園沿革誌』

※原文を全て書写

創立
一九四九年（昭和二十四年四月一日）

園長 宮城文

字新川では幼児教育の必要に迫られながら種々の都合で幼児教育機関設立の実現を見る事が出来なかつた。それで一部の児童が遠くヤエヤマ、みやとりの両園に通っていたが、みやとり幼稚園児童数が収容限度を越えるようになり新川は字としての幼稚園設立を急がねばならない窮地に迫った。そこで字民の要望により字会長佐久真長助氏が中心となられ十一人の設立委員が上げられて設立準備が進められ一九四九年三月十七日認可となった。当時太平洋戦争で荒らされていた青年会館はそのまゝでは園舎の使用は出来ないという事になり同年四月十一日創立開園を実現する事が出来た。創立はしたものの資金を初め何一物もない文字通りの真裸であった。三十円也の月謝では設備、備品、給料という運営は出来そうもない哀れな経営難にぶつかるのであった。そこで、一方法として薄給で犠牲的奉仕貰える方からと設立者の嫁に当たる佐久真スエ、園長次女宮城弘子の兩人を保育に採用して字民と共に会館の設備物両面に協力方を御願ひして八九人の幼児を育てる大決心をしたのである。

設立代表 佐久真長助

設立委員 池城安伸他十二人
会館復旧委員 屋嘉部長佐他九人
創立委員 池城安伸 富田孫伴
石垣永伴 真謝高計
石垣永光 白保政貞
内間安助 前高西秀雄
高那太郎 真久田清
宮城長義 宮城文
佐久真長助

会館復旧委員 黒島安典 屋嘉部長佐
浦崎永八郎 宮城信勇
佐久真長助 黒島安重
石垣長三 池村英可

後援 部落会婦人会
PTA 宮城信範

命名 宮城信範
設立当時のみやまえ幼稚園

所在地 マイチパー嶽前字青年会館
敷地 五〇坪

園舎 二六、五坪
其他 二、五坪

運動場 一〇〇坪（マイチパー嶽庭）
設立許可 一九四九年三月七日

園長 宮城文
保育 佐久真スエ 宮城弘子

一九四九年度
四月十一日 第一回入園式 午後祝賀会
入園児 八九人
字有志多数参列

四月十三日 物品購入
祝賀会は字有志の一品携持

一、用紙類
一、水飲用バケツ二
四月十五日 プランコ一機寄贈 池村英能氏
マイチパー嶽東道路の石垣のすぐ側に池村氏自費で作っていた。石垣ハツエ氏囑託（週一圓月三〇〇円也）

四月十九日 組分け 梅竹二組
四月廿日 鈴木長次郎氏 絵本二冊寄贈
桃太郎 猿蟹合戦
終戦後物不足最中で助かつた。鯉幟掲揚 職員手製の紙鯉幟ではあるが 勇ましく涙ぐましいと思つた。カシワ餅を配給して祝う。

五月二日 カシワ餅は園長宅からのプレゼント
五月五日 子供の日 遠足農林高校
五月七日 黒板寄贈 高那太郎氏 当真太郎氏
父兄会
一、保育状態参観
一、意見発表
一、協議
会長推選 南孫意氏
評議員 富田孫伴氏他十人
椅子の設備方法決議

五月十三日 椅子四十脚出来上り
五月廿三日 砂場用砂馬車一台 請盛氏寄付

一、製作 大浜善信氏
一、工賃一部は大浜善信氏負担
一、工賃不足は父兄の負担

五月廿三日 椅子全部出来上り計九〇脚（水入）
六月二日 椅子全部出来上り計九〇脚
六月二日 戸袋修理
六月廿六日 駆虫済海人草服用
七月七日 七夕まつり
二組に分れ七夕飾り共同制作
菓子配給 七夕の歌合唱
七月廿一日 一学期終業式
夏休中の登園は八月十一日、十二、廿一日
二学期開始
労働祭に付き休園
スベリ台一台備付 用材は金城淑子氏寄付 工賃は番小屋借家人の渡辺石松氏奉仕による
第一回運動会 石中と聯合して石中校庭で挙行政
水飲用ドラム缶盗まる
十月廿六日 金参千五〇〇円也をオルガン注文にと鈴木氏に委託す
十月十四日 第一回学芸会
十月十日 午前中父兄午後字有志数人
教育祭 休園
職員は尚学館に出席
市役所から補助金千五百円也受く
文教部からの配給あり
アンダーシャツ四枚
毛ズボン一 職員用として
三月廿日 第一回終了式
終了児 女三七 女残留児二
男四九 男残留児七
皆出席一 八六八
一九四九年度 創立当時 文教部から無料配給 クレオン一箱 チョーク一箱 ノート一